
母の恋人

jinxx.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母の恋人

【Nコード】

N8989T

【作者名】

j1nxx.

【あらすじ】

人は嘘をつく。つかないまでも、何かを隠して生きている。あなたはそのどちらですか？

事故で急死した母が遺した日記帳、そこには若い男との赤裸々な関係が記されていた。

（モバスペBOOKからの転載です。モバスペBOOKの方がお話し

が先に進んでいます)

母の日記

「葬式って、何でこんなに面倒臭いんだろうな。通夜やって、葬式をしてさ。その後も四十九日、百日、初盆、一周忌、三回忌とかさ」樟脳の匂いが染みついた喪服に腕を通してながら、父がそんな愚痴を言った。

「人が一人死んだんですから、大変なのは当たり前です。簡単に済ませることなんか、できる訳がないでしょう」

そんなことを言っていた母が事故死したのは、高校卒業が目の前に迫った深夜だった。

父は喪主の席に座りながら、あの時のように面倒臭いと思っているのだろうか。そっと横顔を覗き込むと、父は肩を震わせながら泣いていた。

何度も何度も浮気をして母を苦しめていた癖に、一体何が悲しくて泣いているのだろうか。それとも、これは後悔の涙なんだろうか。男って言うのは、どうにもならない状態にならないと分からない生き物なのだろうか。

帰って来ない父をキッチンで待つ母が、暗闇をボーッと見詰めていた姿が思い出されて、切なくて、苦しくて。でも、遺影の母は、思いっきり笑っている。良く分からない感情に、苛々して制服のプリーツを握りしめる。けれど、そんな中でも、泣き続ける父が情けないことだけははっきりしていた。

母はいつも能面のような顔で、背負う苦しみや悲しみの、一人の独りの世界で暮らしていて。私はそんな両親とは全く違う次元の、まるで病院の無菌室のような、綺麗な綺麗な世界に住まわされている

た。

だから幸か不幸か、母がいなくなっても、寂しいとは思わなかった。だって、生きてた時から、母は私の傍にはいなかったんだから。

感じの悪い警察官が、「自殺の可能性がある」なんて唐突に言った時、怒鳴り出す父を尻目に、それもあり得える。と、思ったのは、私も、女だから。

女の私が、理解できるから。

深夜、農道を猛スピードで走っていた母は、ハンドル操作を誤って土手下へ転げ落ちた。ブレーキ跡が無かったから、自殺の可能性があると言う。それに過剰に反応している父は、探られたら痛い腹を持っている。

感じの悪い警官は、父みたいな裕福な男を嫌な気持ちにさせて、心の底では楽しんでるように見えた。どんなに引き締めても、口の端が少し上がる。私の視線に気付いたのか、警官は誤魔化すように拳で口元を拭った。

車が土手に落ちた衝撃で、母の体はフロントガラスを突き破った。宙を舞った母の体は、田んぼ横の用水路に叩き付けられ、後頭部が粉々に砕けた。他に外傷はなかったから、運が悪かったとしか言えないと思う。十八歳の私でも分かる。自殺するなら、もっと確実な方法を選ぶ筈だ。

あの夜、警察から連絡があって、私は父の携帯に、何度も、何度も、何度も、連絡をした。けれど、自宅からの電話だったからだろう。父は電話に出なかった。それどころか、最後には電源を切ってしまった。

翌日、母の冷たい視線を覚悟して帰ったらこんなことになっていたら、父はパニックになって、泣き、狂い、荒れた。

「何で夜遅く、あんな所を車で走るんだ！」

やっと落ち着いた父の口からは、母を責める言葉しか出てこなかった。ああ、この人は、父、夫、男としてじゃなく、人としても駄目になってしまったのか。

「走らずにはいらなかったんじゃないの？」

呟く私に、「お前に何が分かるんだ！」と、酔った父が睨み付ける。父が泣き続けたのは、母の死を悲しんだからではなく、自分が悪人になってしまった、このシチュエーションへの悔しさからだった。……それに気付いてしまったから。父と暮らす理由が、探しても、探しても、もう何処にも見付からなかった。

母の遺骨は、祖母によって実家へ持ち帰られた。勿論、世間体を気にした父は猛烈に反対した。けれどそんな自分は、世間では不倫なんて言われる人の道から外れたことをしているのから勝手過ぎる。四十歳半ばの女好きな父が、再婚する確率が高いから、

「最終的に、何人の女をお宅のお墓に入れるつもり？」
と、祖母に言われて黙るしかなかった。否定しなかったのは、直ぐに愛人を呼び寄せたいかも知れない。

「繭美は、うちに引き取りますからね」

私は父を嫌悪しながら、それでも繭美は僕が育てます！と、祖母の申し出を断ってくれるのを待っていた。いや、そう信じていた。

「――必要なだけの金は、送ります」

父は顰めっ面で、そう言い放った。

「娘が必要なのは、お金だけじゃないんですよ！まあ、貴方にそれを言っても、分からないでしょうけどね！」

一石二鳥、一挙両得、漁夫の利、なんだか似たような言葉が頭に浮かんだ。母と私を、一度に厄介払いできた父。一生懸命に眉間に皺を寄せているのは、笑いたいのを堪えているから？瞬間、父が可哀想になった。この人は気付いてないんだ。平凡で退屈な家庭があったから、他の女とヤルのが楽しかったんだって。たまに会う愛人が始終自分の傍にいたら、母と同じように煩わしくなる。

「繭美、元気でな」

元気でな？最後の別れのような挨拶をする父は、私の顔さえ見ようとしないう。熱い怒りが、鳩尾辺りまで迫り上がって来る。でも私は母のように、冷たい視線を投げつけるだけにした。父はそれに気付くと、今まで見たこと無いくらいに項垂れた。可哀想なパパ。憐れなパパ。貴方は全然、分かってないよ。

「元気でな。貴方、自分の娘に一生会わないつもり？」

「いや、そんなつもりじゃ……」

祖母の顔は、父への憎しみでドス黒く変色している。母を殺したのは父である。そんな祖母の考えを変えるのは、きつと、一生無理だ。父は諦め顔で、視線を逸らした。

「ママの遺品は全部祖母の家に持って行くか処分して、ここには残さないように するから」

私の言葉に、父は青白い顔で頷いた。

母の衣類、驚くほど少なかった。

「歯科医の奥様なのにねえ、お洒落もさせてもらえなかったなんてねえ……」

祖母はそう言って目頭を押さえたが、そうじゃないことを私は知っている。母は父が浮気し出した頃から、「女」であることを止めたんだ。顔立ちは綺麗なのに、化粧もせずに不機嫌な顔で生きる。こんなに醜くしたのは、父だと思い知らせる為に。

「繭美ちゃん、ちょっとその段ボールを開けて」

「……はい」

押し入れの奥に、半ば風化した状態で残っていた段ボール。……何故だか、心がざわついた。

「まあ、この着物。結婚した時、私が持たせたものじゃない。これ着たことあるのかしら？」

「見たこと、ない」

「まったく。あの子は本当に、侘びしい生活してたのねえ」

祖母が母を哀れに思いつつ、感慨深げに洋服を一枚一枚丁寧に畳んでいているのを確認して、私はゆっくりと、その秘密の香りがする段ボールを開けた。

中には黴臭い本が詰まっていて、もう長い間放って置かれたよう

に思えた。そう言えば、「繭美が生まれる前までは、読書ばかりしていた」と、母が言っていたのを思い出した。あの時の母の口調は、少し、私を責めていた。

「ママの本みたいだけど、お祖母ちゃんどうする？」

「持って行ってあげましょ。でもその箱ボロボロねえ、これに入れ替えて頂戴」

その赤い革表紙の本は、セピア色の風景にパツと咲いたバラのように、艶やかに光輝いて私の目に飛び込んで来た。

手に取ると、ハラリと茶褐色に変色した押し花が落ちた。慌てて広げたページには母の美しい文字が書き綴っており、私はハッと祖母を盗み見る。

「この髪飾り、私が買ってあげた物だわ」

祖母は気付いてない。パラパラと捲ると、何処のページにも同じ名前があった。

「聡」

聡…、聡…、聡……。これは母が書いていた、日記のようだった。

しかし日常を綴ったものではなく、この聡と言う人との関係を書いた記録帳。それは二年前の八月から始まり、事故で亡くなる当日まで続いていた。鳩尾辺りが、ぐう、と締め付けられた。

「繭美ちゃん、早く入れてね。こんな家からは、早く帰りたいわ！」

「は、はい」

祖母にせき立てられ、私はそれを慌ててセーターの中に忍び込ませ

た。

祖母の家は、父の所から電車で一時間ほどの埼玉の奥地にあった。祖父はまだ母が高校生の時に亡くなり、祖母が一人で寂しく暮らしている。

電車に乗っていると風景からビルがどんどん少なくなって、かわりに田園や山が広がる。きっと私の住む世界は、この景色のように百八十度変わるだろう。不安も、興奮も無かった。何も感じる必要はないのだ。私には、それしかできないのだから。じたばたせずに、静かに受け入れよう。そう、決心していた。

「お祖母ちゃん、引き取ってくれてありがとう」

「何言ってるの。こんな広い家に一人で住むのも退屈なんだから！」

祖母は始終ハイテンションで、私と暮らすことにやや興奮気味だった。私はそんな祖母に合わせて、「すごい」と意味もなく繰り返し叫ぶ。そして、気付く。祖母と暮らすことは、つまりこんな偽りの自分を演じ続けるということに。

母が寝ていたというベッドに横になり、黒光りする古い天井を眺めた。そして、ゆっくりと、母の日記を開く。

栞のように挟まっていたのは、ガソリンスタンドの従業員らしい男が、賢明に車を磨いている写真。この人が、恐らく聡。

遠くから撮られた写真には、母の無数の指紋が付着していた。遠過ぎて顔さえ分からないのに、母は何度も眺めたのだろうか？ まるで、同じクラス的女子達みたい。

クラスの女子達の中には、仲良し、と、される子が数名いた。け

ど肝心な事は何一つ話せない、孤立しない為の、私が変わった子供じゃないことの物的証拠だった。

それでも毎日メールを交わし、休日は互いの買い物に付き合い、私は普通に普通に見えるように装っていた。彼女達は同級生の男子にキヤーキヤー奇声を上げ、告白するだの、失恋しただのと言っては、くだらない詩を作ったりしていた。遠くから携帯で好きな男の子の写真を撮っては、待ち受けにしていたりする。私には、彼女達に分からなかった。彼女達の価値観の全てが、理解できなかった。

「繭美、シヨウ君とはどうするの？」

「ん？あいつ関西の大学に行くらしいから。」

シヨウは、私のダミー彼氏だ。同級生の男子になんて、全然魅力を感じなかった。けれど、友達と話を合わせる為に適当な子を選んだ。サッカー部で成績は中の上で、顔もまあまあで、何よりお育ちが良くて両親の受けが良い。そしてなにより、「清い関係」で満足してくれる、純粹培養された良いとこの子だ。童貞としなくてはいけないなんて、ぞっとする。誰かの初めての女になるなんて、気持ち悪すぎる。

「別れちゃうの？」

「うん、あいつは遠距離でもいいって言ってたけどね」

本当は、同じ大学を受験する約束をしていた。寸前になって、約束を破ったのは私。高校で知り合った男に、一生を左右されるなんて勘弁して欲しい。

「えー、悲しくない？」

「まあ、ね」

悲しいのは本命の和之が、結婚するから関係を終わらせようって言って来た事。

和之が大学院生の時、私が通う塾でバイトをしていた。生徒だった十三歳の私の「世の中、全然つまらない」って顔が目に残ったらしい。事実、私は本当に、退屈な毎日を過ごしていた。何の不満もないし、でもそこが問題なんだと、自分でも気付いていた。不満がないのは、多分期待してないから。

和之は初めて私に興味を持ってくれて、あの無菌室から引っ張り出してくれた男だ。しかも私に「イク」ことを教えてくれた男だから、二度と会えなくなるとかなり寂しい。

「私、和之さんを愛してるかも」

勇気をふり絞って、苦手な媚びの仕草で言ってみたら、何とも言えない酸っぱい物を口に含んだような顔で肩を竦めた。

「それは愛じゃなくて、執着なんだと思うよ。俺の場合は、使い古したバスタオルがなかなか捨てられない」

「執着？それも、愛の一種でしょ？違う？」

恐る恐る聞いてみたら、今度はややシリアス気味な顔になった。

「愛かもしれないけど、愛の王道からは外れているよ」

「え、王道って何？」

「つまりはね……」

トランクスを脱ぎ捨てた妙に白い臀部が、私の笑いを誘う。南の国に行って来たんだって、お菓子やらTシャツやらを詰め込んだ袋を貰った。

婚約者の手前、女の子っぽい可愛い物は買えなかったって、甘えた声で言い訳をする、健気な、和之。

「ちょっと、そんな格好で語らないでよ。もう、いいよー」

和之の肩がトースト色に焼けていてとてもお美味しそうだったから、私はお土産の甘ったるいクッキーを代わりに嚙った。間に白いクリームが挟まっていて、和之がそれを舌で掬って突き出すから、胸をムカムカさせながら舐め尽くす。

「甘いね……」

「甘い」

この体に悪そうなクリームは、私達の関係にぴったりだ。嘘臭くて、甘過ぎる。

「和之さんは、婚約者さんが大事なんだね」

「うん、繭美が僕と同じ年なら、君と結婚したかもしれないけど」

何か勘違いした和之が、ほんのちよつとの優しさを覗かせる。同情。それを敏感に察知した私は、今時の生意気な女の子に戻る。

「私、別に結婚とかしたくないんだけどな――」

時々こうして、安っぽいラブホテルや、都心の味気ないビジネスホテルで会って、ただ、気持ち良くさせて貰いたいだけ。そう続けたかったけど、和之の面倒臭そうな顔に気持ちが折れてしまった。

「俺が結婚したいんだよ。もう直ぐ三十歳だからね。君みたいな女

の子と、一生こうしてクリームを舐め続けられたらいいんだけどね」

「そろそろ落ち着くってことか。だったら和之さんも、愛の王道から外れてるね」

和之がシュンと項垂れるから、私も何だか切なくなってしまった。

「――時々、私とも会ってくれればいいのに」

「俺、そう言う面倒臭いの嫌いなんだ。つか、俺って、あんまり器用じゃないし。奥さんにばれて、修羅場？みたいなさ」

冷たい口調で突き放すから、私は使い古してもなかなか捨てられないタオル以下なのだと思った。なんだか、ゴミ箱に投げ捨てられた気持ちになった。

「でも死ぬまで、ことあるごとに繭美を思い出すかな。傍でどんどん老いて、体型も変わって行く奥さんを眺めながら、繭美の若々しい裸体を思い出して夢想到に耽ったりしてさ。ああ、何である時、俺は繭美を捨てたかなあ、とか、後悔するんだよきつと」

身を振りながら、芝居がかった台詞を吐く。

「俺の記憶の中で、繭美はいつまでも可愛いまんまだよ。俺はいつまでも、そんな繭美に恋し続ける。これ、今はやりの純愛じゃない？」

なんて勝手な理屈だ。呆れると同時に、可笑しくなった。

「和之さん、ちょっと相談したいことがあるの」

「え、何？」

さっきの話の延長なのか。和之はあからさまに嫌な顔をして、シャワー室に逃げていった。本当は、母の日記のことを相談したかったのに。バックの中には、赤い革表紙の日記がある。抱きしめると、和之の暢気な鼻歌が聞こえて来た。母の感情は、娘の私が受け止めるしかないのかも知れない。

こうして私は誰にも相談することをせず、母の日記を開いてしまった。それが、母の仄暗い心の中を覗くことになるとは知らず。

母の欲望

◆八月十三日◆

夫はグアムで友人とゴルフ三昧だと言って、朝早くに出掛けて行った。思い起こせばあの人は、私達と休日と一緒に過ごしたことがない。

二十年近くも一緒に暮らしているのに、私は夫が全く理解できない。何故、夫は私をこんな風に扱うんだろう？私の何が、夫をそんなに苛立たせるのだろうか？

それでも夫が気に入るような、食事やインテリアや服装や仕草や、全ての全てを合わせて来たのに……。夫は私を愛してくれない。愛してくれないどころか、私に興味がない。まるでそこに存在していないように無視するから、私は夫の気に障るようなことは避けて、気配を消して生きて来た。

私は生きてる。けど、死んでる。

まるで土に埋められたように、息苦しい。身動きできない。けれど、そんな生活は一変した。今日、彼に会ったから。

いつも行くガソリンスタンドで、彼は車のフロントガラスを磨いていた。

「この車、可愛いですね。何かコロコロしてて、黄色みみたいなオレンジみたいな色もいい」

「——カボチャみたいでしょ？」

言って後悔した。と言うより、若い男に声をかけて貰って、上機嫌

で返事をした自分が嫌だった。中年女のプライド。くだらない、プライド。

それは、灰皿を彼に手渡した時だった。彼の髪から滴り落ちた濁った汗が、ハンドルを握る右手の甲に落ちた。彼は、気付いていない。

「今サービスクャンペーン中で、満タンのお客さんにティッシュを差し上げてます！」

私は右手を動かせない。左手で無造作にそれを受け取ると、滴を落とさぬように車を走らせ、スタンドから遠く離れた所で停めた。

半濁色の彼の汗を、暫く眺める。そのアイデアは何処から湧き出て来たのか？良く分からない。兎に角、淫らで狂ったことをしたくなった。

私は舌を突き出して、その滴を味わおうとしたのだ。でも舌先がそれに付く瞬間、滴は私の歪んだ欲望から逃れてこぼれ落ちて、大きく開いたブラウスの谷間に流れて行った。

その時の感覚は、彼がそこをスツと撫でたようだったから、私は鳥肌を立ててその快感に酔いしれた。

彼の汗の混じった体臭や、薄く髭の残る顎のラインを思い出して、体の何処から溢れる熱い欲情に涙ぐみ。涙ぐんだ後で、彼が繭美と大して変わらない年齢であることを考えた。

私は病んでいるのだろうか？若い男に、我慢ならない程に欲情している自分を、激しく嫌悪する。

でもバックミラーを覗くと、化粧もしてないのに頬も唇も赤らんでいて、やっと生気を取り戻した、女の、生きた私が微笑んでいた。

——少しの喜び、嫌悪感。

考えていたら、何だか眠れなくなってこうして書き記している。私にだって、欲望はあるんだ。

◆八月十五日◆

帰って来た夫が私にトランクを投げて、無言でシャワーを浴びに行った。トランクを開けると、汚れたゴルフシャツの膾えた匂いが鼻を突く。中年の男の、汗。酸っぱい物が込み上げて、慌てて洗濯機に放り込んだ。

免税店の袋を開けてると、衛生士さん達にだろうか？チョコレートのお包みが幾つかと、趣味の悪いTシャツが何枚か入っていた。子猫柄のは、繭美にだろうか？あの子は絶対に着ないだろう。

それと、翡翠色の香水瓶が一つ。

「——それ、お前にだ」

腰にタオルを巻いただけの夫が、得意気な顔で立っていた。ゴルフシャツの形に赤銅色に日焼けした姿が滑稽で、思わず笑ってしまった。

「俺は良く分からないけど、人気あるらしいから」

「綺麗な瓶ね、ありがとう」

夫は何時に無く上機嫌だった。きっとこの香水も、女に選んで貰ったんだろう。今回の旅行にも、あの女と行ったんだろう。どうでも、

良いか。

グアムではロクな食事をしてなかったからと言いながら、美味しそうに酢の物を食べている。

「お前は料理だけは上手い」

それが夫の口癖だ。男は性欲ではなく胃袋で家に帰って来るから料理はちゃんと覚えなさい。良く聞く話だが、夫に関しては未だ性欲が優先らしい。勿論、年老いたらそうなるかもしれないが。私はその時まで、ずっと食事を作るだけの女でいればいいのか？そう考える度、切なくなって来る。

夜になって、夫が私に手を伸ばして来た。それは滅多に無いことで、私もそれを受け入れるのことも滅多にないのだけど。グアムでは、若い女が自由にならなかったのだろうか？けれど、私も持てあます欲情の捌け口が必要で。

別の誰かに魂がある状態でも、体は正常に反応するのだから、不思議。

明日あの香水を付けて、ガソリンスタンドに行ってみようか……。

◆八月十六日◆

ガソリンスタンドの前を一度通ったけど、彼の姿は見えなかった。スーパーで買い物してから、もう一度通ってみる。やはり、いない。今日は、お休みなのかも知れない。

繭美の塾に迎えに行くと、大きなバイクに跨った青年があの子と親しげに話していた。

日焼けした肌と金色の髪、見るからに軽薄そうな男だ。男が耳元に囁く度に、繭美が小さい笑い声を立てる。繭美の視線が、男に媚びを売るそれであることに気付き、愕然とした。この子はもう、女なんだと。

「――あの人、誰？」

「塾のアルバイト講師。大学院生なんだって」

「何か軽そうな男ねえ、あんまり親しくならないでよ」

「はい」

繭美は子供の頃からストーカーに悩まされたり、男に好かれる雰囲気を持っていた。一度などは、近所の男の子に家に忍び込まれたことがあった。その辺りは父親に似ているかもしれない。口答えは絶対しないが、腹の中では何を考えているか分からない。そんな所は、私に似ているのだろう。

夫は繭美の聞き分けの良さを賢さと評価しているが、私は違う。賢さは賢さだが、ずる賢さ。親を欺く、強かさ。繭美みたいな子ほど、裏では何をしているか知れないのに。男親は単純だ。

そう言えば、子供の嫌な部分は親の欠点だと思った方が良さらしい。どこかの学者が、言っていた。そんなこと、言われなくても分かっている。私は繭美の中に女を見付け度、言いようのない嫉妬に駆られる。そして、怖い。嫌だ。私の中に既がない、女を見付けるのが嫌。

もう深夜一時を回っている。

夫はまだ、帰って来ない。でも、何だか気にならない。どうでもいい。

◆八月二十三日◆

ガソリンスタンドの前を通ると、彼が車を送り出して深々と頭を下げた所だった。そのままそこを通り越して、急いで自宅に帰る。クローゼットを開けて、洋服を眺めては見たが……。我ながら、センスの無い服ばかりだ。

最後に服を買ったのは、繭美の小学校入学の時だ。ベージュのAラインのワンピースは、夫と繭美と三人で銀座のデパートで買った。あの時の私は夫の不貞に気付いておらず、完璧な妻と母を演じる自分に酔いしれていた。その頃を思い出して、ふいに泣きたくなった。けれどそんな気持ちを振り払うように、頭から勢いよくワンピースを被った。

久しぶりに着てみると、胸の部分が妙にスカスカして変な感じだ。それは体の張りが無くなっていくからだと言うことに気付いた時、愕然として暫くベッドから立ち上がれなかった。

確かに、鏡に写る私の顔には生気が無い。昔あった輝きが、今はもう無い。皺や弛みが問題なんじゃない。私にはもう人を、男を惹き寄せる力がないんだ。それが本当に悲しくて、悲しくて、悲しい。お洒落して彼に会えば、少しは私のことを気に留めてくれるんじ

やないかって、馬鹿なことを考えていた。

——馬鹿。馬鹿。本当に馬鹿だ。

◆九月十日◆

「お久しぶりですね」

彼が真っ白な歯を見せて微笑んだ時、私は激しく動揺して思わず泣きそうになった。それを誤魔化すように咳払いをすると、「風邪ですか？」と、更に声を掛けてくれた。

「最近、急に涼しくなって来ましたからね」

「そうね——」

彼は覚えててくれたんだ！私は勇気を出して、その理由を聞いてみた。

「この車の色、珍しいですから」

夫の趣味なの。言いそうになって、慌てて口を継ぐんだ。私と彼の関係に、夫の情報は必要ない。

「お客さん、印象的だから」

印象的？彼の中に、私はどんな印象を残したのだろうか？それ以上の

答えが聞きたいと思ったが、乾いた私の唇からは思うように言葉が出なかった。

印象的だから、印象的だから、今日一日、その言葉を繰り返して考えていた。どう、印象的なのだろうか？その答えを、自分で繰り返し、繰り返し、考えている。それが私を喜ばせるような、答えでありますように！

夫が酔って帰って来た。酔った時は必ず、私を責めたてる。辛いくさい顔、何をしてても鈍臭い、化粧位たまにはしたらどうだ、気が利かない。次から次へと良く思いつくもんだと感心する。

ストレス発散できるのは、夫が我が侘言えるのは、私だけ。それを受け止めてやるのが、妻の仕事。そう、暗示をかけていた。ずっと。何年も何年も。

夫から罵声を浴びせられても平気でいられるのは、彼の言葉を考えているから。彼の縮れた髪先が汗に濡れて余計に縮れて、子犬のように可愛くて、可愛くて。

私に息子がいたら、こんな気持ちになったのだろうか？夫に罵られた時、息子だったら庇ってくれたのだろうか？繭美は青い顔をして俯く私を、面倒臭そうに眺めてさっさと部屋に上がって行く。冷たい子なのか、あの子には私がとても情けなく見えるのか。

悲しい。

虚しい。

それまで何回も何回もガソリンスタンドの前を通ったけど、彼の姿を見つけることができなかった。どうしたのだろうか？ 具合でも悪いのだろうか？ 私は意を決して、従業員の男の子に聞いた。

「あの……、いつもいた、髪がチリチリした男の子。最近見掛けないけど――」

「辞めたんですよ」

あの子とは全く正反対な、陰気な男が言った。

「ここの仕事、きついから」

フロントガラスを拭く彼の手は、カサカサに乾燥して血が滲んでいく。真夏の太陽と、冬は凍った水。彼の手も、こんなにカサカサだったのだろうか。私は彼のこんな苦勞を、知ろうとしなかった。私はただ、愛らしい笑顔の彼を、玩具のように好いていた。

しかしこの瞬間に、彼が私の中で生身の男になった。だから、どうしようもなくなった。どうしても彼に会いたくなった。けれど、彼はもういない。

「そう、だったの」

私は落胆を隠しきれない。

「でも、近くのコンビニにでバイトしてるみたいですよ」

近く。彼にとって近くとは半径百メートルか、二百メートルか一キ

ロメートルか。

「あら、そう？」

声が裏返ってしまったって、陰気男がニヤリと笑った。私の魂胆は見えないのだろうか。私が彼に感じている愛しさは、こんな男でさえ「ニヤリ」とさせてしまう類の物なのだろうか？急に恥ずかしくな
って、慌てて車を発進させる。

けど、いいんだ。誰が私のこの感情にニヤリとしようと、知ったことか。明日から「近くのコンビニ」を探す楽しみができた。こんなに心が踊るのは、久しぶりかもしれない。

「ママ、なんか最近、嬉しそうだね。何かあったの？」

繭美にそんなことを言われて、ドキッとした。でも繭美はいつもの無表情な顔のままだったから、この心躍る出来事を話すのは止めよう。

私はどうしても、どうしても、繭美に愛情を感じることができない。でも、それをあの子にそれを知られるのが怖いから、絵に描いたような母親を演じてしまう。

こんな心のない母親の娘だから、あの子は冷たいんだ。無理もない。

母の嘆き

：
◇
：
◇
：

母が私に愛情を感じていなかったという事実は、母曰く心が冷たい私でもショックだった。読みながら悲しいような、悔しいような、頭に来るような、不思議な涙が溢れて流れて流れた。

私は母に同情しつつ、母みたいな女にはなりたくないと思っ
ていた。父に怒鳴られ攻められて、小さくなって耐える母の姿は、
その境遇に酔いしれているようにも見えた。その姿は、口汚く罵る
父より寧ろ、驕り高ぶってさえ見える。

母は自分で思う以上に、陰気で無知で、面白くも可笑しくも何と
もない女なのに。そんな自分に気付かず、誰かを責めているその日
記にとっても腹が立った。

母は上品に振る舞まっているつもりだったかも知れないが、端か
ら見れば慇懃無礼に見えることを知っていただろうか？

「繭美ちゃんのパパは、感じが悪いってうちのママが言ってた」と、
同じクラスの子にそう言われて、私は返す言葉が無かった。

そんな母を印象的だと彼が言ったのは、その気取った態度のせい
じゃなかったのか？

さつき日記を読んでも最中、和之からメールが来た。そう言えば
今日、ハニームーンから帰って来たんだ。奥さんの好みでパリに行
くのだと、嫌そうな顔をしていたのを思い出す。

「繭美ちゃんが、恋いしいよう」

こんな関係は面倒臭いと突き放した癖に、勝手なもんだ。と、メールしようとして止めた。勝手に、恋しがっていいんだ。

◆十月十五日◆

調べてみたらあの周辺にコンビニは幾つかあって、私は毎日それを見て回った。一週間それが続けて彼の姿を見つけた時は、感動の余り車の中で暫し泣いた。喜びの余り涙を流したのは、生まれて初めてかもしれない。

ああ、生まれて初めてなのは、この熱くトロトロした感情だ。息もできず、唾液が溢れんばかりに何かを欲し求めたこと。

でも幾ら求めても求めても、彼は私のものにはならない。その答えに辿り着いてしまうと、私のたった一つの喜びが消えてしまう。だから今は必死に、この妄想めいた感情にしがみつく。でも、名前だけでも知りたかった。名前があれば、妄想がより現実に近い付くから。

コンビニに入ると、目に付く物を片っ端から買い物カゴに入れレジに持って行く。沢山買ったのは、会計に時間がかかるように。彼の名札から、名前をちゃんと記憶するように。

「溝呂木聡」

心の中で、何度も反芻して記憶する。なんて清々しい、頭の良さそ

うな名前。

「あれ、お客さん。ガソリンスタンドに来てた人ですよね？」

「え？」

平静を装うのに必死だった、足の先から震えて来る。

「あ、覚えてないですよ。僕、直ぐそのガソリンスタンドでバイトしてて。お客さん、カボチャ色の車に乗ってた人ですよ？家はこの近くなんですか？」

「——え、ええ」

「奇遇ですよええ」

彼が無邪気に笑うから、私は自分の下心を知られたのだと思った。恥ずかしさから買い物袋だけを掴んで、逃げるようにそこを後にする。

「お客さん！お客さん！ちょっと、待って下さい！」

その声に振り返ると、彼が凄く近くまで来ていた。私は何かを期待して、鼓動を早くする。

「お釣り、忘れてますよ」

「あっ！」

「チップにしたら、多過ぎるかなって思って。」

お札を何枚も握りしめる彼の手が、ガソリンスタンドの陰気男と同じくカサカサに荒れていた。そのささくれだった指が、私の掌を引っ搔く。

「ごめんなさい……。ありがとう」

「いえ、じゃ」

体を折り曲げて、私の目を覗き込んだ彼の陽気な瞳。黒目がちなやんちゃな瞳には、私がもう無くしてしまった輝きがある。私にもその輝きが欲しい！

真夜中、鼾をかいて眠る夫の顔を見下ろすと、押さえ切れない怒りが、腹の底から溢れて来る。頭の中で何度夫を、殺しただろう……。私の輝きを殺した男。

死ね。

死ね。

死ね！

◆十月十七日◆

「また、会いましたね」

スーパーで買い物をしていると、彼と偶然に出会った。溝呂木聡君。もうこれだけ会ってるんだから、聡君と呼んでもいいだろう。聡君、聡君、聡君！心の中で、何度も叫んだ。

「近くに住んでるの？」

「はい。直ぐそのブルーのアパートなんです」
「じゃ、ご近所さんのね」

そのアパートは本当に近所だったから、嬉しさを隠すことができない。妄想と現実の壁が、少しずつ薄くなる。

「今日、夕飯は何にするんですか？」

「お鍋にしようと思ってるの」

「ああ、いいなあ」

「――貴方は？」

聡君のカゴの中には、焼きそばの麺、キャベツ、ピーマンが入っている。

「見ての通りの焼きそばです。普段はコンビニの賞味期限ギリギリの弁当とかなんですけど、今日は休みだったんで」

「お料理できるなんて、偉いわね」

「料理って言えるかどうか、分かりませんが」

照れ臭さそうに笑う彼の後ろに、若い女が立っていた。不機嫌な表情から、聡君と何か関係がある女だと分かる。

「さーとしー、何してるの？ ええ？ 焼きそば？ カズミは焼き肉とか食べたいんだけどー！」

女が警戒心丸出しの目で、こちらを睨むように見るから嬉しくなかった。こんな若い子に、敵対心を燃やされるなんて。

「さーとしーの、ママ？」

「違うよ。俺の母親、こんなに若くないだろ？」

気まずそうに頭を下げて去って行く、聡君の背中を見送った。彼女がいたのは、思った以上にショックだった。あの若い女のように、聡君に寄り添って歩きたい！いや、……やっぱり、この気持ちは間違っている。

分かってる。

分かってる！

◆十月二十八日◆

今日は、私の四十四回目の誕生日。夫は帰りが遅いと言うし、繭美は塾のお友達の所に泊まるという。二人とも、私の誕生日など忘れてる。

せめて好きな物でも食べようと、買い物に出かけて啞然とした。食欲さえ無い。何が好きだったのかさえ、忘れてしまっている。何故ならずと、夫や繭美の好みを中心に、生活してきたから。妻とは、母親とは、そんな生き方をすべきだと思い込んでいた。でも、こんなに彼等に自分の人生を捧げても、一言「誕生日おめでとう」すらない。何故なんだろう？何故、こんな人生を送らなければいけないのだろうか？何をどう間違えたのだろうか。

「あっ、また会いましたね」

でも聡君だけは、こんな私に声をかけてくれる。微笑んでくれる。嬉しかった。

「あら、今日はお休み？」

「はい」

「――今日も、焼きそば？」

「レパートリーが、少ないんですよ」

苦笑いの彼がクシャクシャと縮れた髪を掻くから、思わず乱れた部分を整えてあげた。

「す、すいません。つい癖で、髪をくしゃくしゃしちゃうんです」

「あ、御免なさい。私もつい、子供みたいに扱って……」

「いえ、そんな、ありがとうございます」

二人とも気まぐずくなって俯き、互いのカゴを見詰め合う。

彼のカゴには前に会った時と同じ焼そばの材料が入っていて、何だかそれを見詰める度に切なくなってくる。栄養があって美味しい料理を食べさせたい！世話を焼きたい！でもそれは、私には叶わないこと。

「――じゃ、失礼します」

去って行く彼の背中を見詰めながら、叶わぬ思いを胸に隠した。

好きなワインとオリーブ、チーズにクラッカー、フィットチーネとサーモン。生ハムとクレソン。目に付いて好きだと思う物をどんなカゴに入れる。フルーツの詰め合わせを、ケーキの代わりに買った。

レジを済ませて大きな買い物袋を何個も抱えて外に出ると、土砂降りの雨だった。聡君が空を見上げて、困った表情を浮かべている。

きつと傘を持ってないんだ。

どうしたらいいか悩んだあげく、私は車を彼の目の前で停めた。どんなことになっても、今日の私には言い訳がある。だって誕生日だから。これは神様の、ご褒美だ。

「送って行くわよ」

自然な感じに聞こえたかしら？彼は笑顔で車に乗り込んで来たから、私に好意を持ってくれてるの？と、期待に胸を膨らませる。

「助かりました。俺、傘を持ってないんです」

「じゃ、雨の日はどうしてるの？」

「濡れて行きます。でも今日は貴女に見つけて欲しくて、あそこで待っていました」

「え？」

「あっはっははは」

笑って誤魔化して、髪をクシャクシャにする。私はまた乱れた髪を直してやって、子供みたいに扱ったことを悔やんだ。彼は嬉しそうに微笑んでいるから、私の中の母性のような、新しい何かが、疼く。

「コーヒーでも如何ですか？」

アパートの前に着くと、彼が本当に本当に普通に聞くから、思わず「うん」っと、頷いてしまった。

カンカンカンと、鉄製の古い階段を上ると、夫が学生時代暮らししていた1K風呂トイレ無しのアパートを思い出した。あの時の夫は、健気だった。裕福な家に生まれた私に釣り合わない自分を、恥じていた。いつからだろう、夫が私の上に立つようになったのは。

部屋の中は意外に片付いているから、スーパで会った彼女の存

在を思い出し居心地が悪くなった。

「私、上がっていいのかしら……、ガールフレンドが気を悪くしないかしら」

「ガールフレンド？ いませんよ。ああ、スーパーの子は悪友です。カズミって言って、幼馴染みです。」

俺、今時な子って、好きじゃなくて」

その言葉で呆れるほどに安堵して、部屋に上がる。すると、不思議な匂いが鼻を付いた。

「油絵？」

「はい。学生時代から何となく描いてるんです」

「そうなの……」

「この部屋、狭いから。本当はもっと、大きいのが描きたいんですけどね」

手渡されたマグカップの黄色と、白の水玉柄、色褪せたブルーのカーテンと、薄茶色の愛くるしい彼の瞳。彼の全てが愛しく愛しく感じる。それは単純に言ってしまうえば、欲情しているだけかも知れないけど。そんな単純な物ではないし、そう言ってしまうては、つまらない。

「今日。私の誕生日なの」

「そうなんですか。おめでとうございます」

彼は何か閃いたように、乱暴に押し入れを開けた。取り出したのは、小さなキャンバス。それを恥ずかしそうに、手渡す。

「プレゼントです。お誕生日、おめでとうございます！ なんーて。」

俺の絵なんか、貰って嬉しくないだろうけど」

感激した。泣きそうになった。誕生日を祝ってくれる人がいる。けれど絵心のない私は、上手く感想を言うことすらできない。上手な絵ね！では、逆に馬鹿にしているように聞こえるだろうか。

緑のテーブルクロスの上に、白いハンカチをクシヤクシヤにして放り投げたような絵。そうとしか見えないから、申し訳ない気持ちになって素直にそう告げた。

「私、絵心がないから……。気を悪くしないでね」

「タイトルは、嘆き、ですから。そんなところです。その人は涙を拭ったハンカチを、テーブルに投げ捨てんだ。その解釈で、間違ってませんよ」

その言葉にほっとして、絵を胸に抱きしめる。

「嘆き……」

嘆き、嘆き……。私の嘆きを彼にぶちまけたくなった。夫のこと、繭美のこと、自分のこと。女の自分を、洗いざらい全部。

けれど、どうやって切り出して良いか分からない。でも我慢していた感情は、どんどん涙を伴って溢れて来た。それに驚いたのは私だけで、聡君は落ち着いている。やはり、私はここに来てはいけなかった。いい年して何をしてるのだろう。激しい後悔に苛まれて、逃げるように玄関に向かった。

「どうしたんですか！」

聡君が驚くほど冷静な声で言うから、私はハッとして振り返える。彼の年齢に似合わないその落ち着いた態度が、私を益々不安にさせ

た。

「本当にどうしたんですか？俺達まだ、互いの名前さえ名乗り合っていないのに……」

「そんな必要ないわよ」

そう言い捨てて帰って来てしまった。

帰宅して、雨に濡れたまま食べるようにチーズやクラッカーを音を立てて噛み砕き、サーモンや生ハムを咥えては引きちぎる。そして彼に言えなかった思いと一緒に、ワインで流し込んだ。けれど幾ら食べても、幾ら飲んでも、お腹は一杯にならず全く酔わない。

そのままテーブルに突っ伏して眠りこけて、目を覚ますと深夜一時を回っていた。部屋の中はシーンと静まり返っていて、ああ私は一人なんだなあと思ったら涙が止まらなかった。これからずっとこの孤独を抱えて、生きるのは嫌！

この生活を捨てて、何処かに逃げたい！

——消えたい、逃げたい！

◇
◇
◇

玄関の飾ってあったのは、彼の絵だったのか。金箔の豪華な額に入れてあったから、不審に思った父がしつこく聞いていた。

「お友達の息子さんの絵よ」

素っ気なく答えた母の頬が紅く上気していたのは、怒りの為ではなかったようだ。そうだ。明日、父の家に行って、あの絵をここに持って来よう。

母が聡に恋心を抱いていたという事実は、私をとても気恥ずかしくさせた。と、同時に、ホッとする自分もいた。何故なら私は、母が不幸のどん底で死んだと思っていたから。

母は死の直前まで恋に身を焦がしていて、……それは私には理解できない感情。まだ知らない感情だ。冷たい心の私でも、感じるこ
とができるのだろうか？

母の過ち

◆十一月十五日◆

実は彼にまた会うのが怖くて、少し離れたスーパーまで行っていた。無意識に、彼の姿を探してしまう自分が嫌だった。欲求不満の中年の女が、若い男に狂って欲情に身を焦がしている。少しだけ残っていた自尊心が、そんな自分を許せなかった。

でも今日は土砂降りの雨で、遠くまで行くのは億劫だ。それは言いつ。彼の気持ちを知リたかった。あの日の彼の態度から、私への好意が感じられたから。感じるだけではなく、はっきりと言葉で欲しくなった。欲しくて、欲しくて、我慢ならなくなった。

でも、もしその好意がはっきりしたら……？それに溺れて、溺れて、歯止めが効かなくなるかも知れない。でも……。溺れていっそ、こんな家庭なんてボロボロのガタガタに壊れてしまえばいいんだ。

「すみません」

ふいに腕を捕まれた時、私は驚いて身を竦ませた。何故なら、その声の主が直ぐに分かったからだ。

「この間は、どうも……」

先日の気まずさなんか微塵もない、爽やかで陽気な笑顔の聡君がそこに立っていた。私は嬉しさと動揺と、彼に触れられた感動とが一気に押し寄せて来て、腰が抜けそうになった。ふらつく私を、聡

君がしっかり支えてくれる。

「大丈夫ですか？ 具合、悪いのかな？ ……やっと会えましたね」

「この間は、ごめんなさい…。変な態度をとってしまっ」

私の声は消え入りそうで、我ながら情けない。

「いえいえ、俺、気にしてませんから」

抱えている籠がまた目に入った。前回と同じ、もやし、キャベツ、ピーマン、豚肉、焼きそばの麺。

「焼きそば？ また？」

「はあ、ほんとワンパターンっすね」

髪に手を伸ばす彼が、悪戯っ子のような瞳で私を見た。

「俺、貴女が髪を直してくれるから、わざとクシャクシャにしてるんですよ」

ギャフン、となった。私は彼の全てに圧倒され、打ちのめされ、惨敗してしまった。もう、自尊心もへったくれもない。彼が欲しくて、欲しくて、堪らない。肉体だけでなく、全て。

全ての、全て。

アパートの畳は太陽の光で変色して、表面がボロボロになっていた。聡が私の上で激しく動いた痕跡が、黒いニットの背中に沢山付いている。

「うあ！ごめんね。うちの畳だよね？」

彼が全裸のまま、それをガムテープで取ってくれる。ちょっと、感動した。男性経験は余りないが、男とはことが終わると腕枕でロマンティックに語るか、逆にその行為自体を後悔して、気まづくなるのかと思っていた。

むくつと起きあがった彼は、にっこり微笑んで、お腹すいたなーと台所へ向かった。

私は急に恥ずかしくなって、捲れ上がったニットを下ろして身繕いをし始める。するとチーズを咥えたまま走り寄って来て、背中についた屑を取り始めたのだ。若い男って、こうなんだ。その行為の後でも、こんなに「普通」にはしゃぎ回れるんだ。

「お腹空いたの？何か作ろうか？」

「やったー、本当ですか？」

彼の裸体は思ったよりがっしりしていて、無駄な肉は付いておらず夫のそれとはどこもかしこも違っていた。引き締まった臀部に見とれていると、恥ずかしいなあ、と、やっとトランクスを履く。その仕草も、若い。可愛い私の、若い男。

「年上の主婦フェチなの？」

どうしても気になったので、私の作ったチャーハンを食べる彼に聞いてみた。

「ええーッ！フェチ？何っすかそれえー！」

「私、貴方より随分と年上よ」

「幾つなんですか？」

チャーハンを目一杯頬張った彼が無神経に聞くから、ちょっとムツとしてしまった。それを敏感に察したのか、今度は彼が憮然とした態度で言い放った。

「貴女が何歳かなんて、関係ないじゃないですか。年上だって言うから、流れて聞いただけですよ」

「四十四歳になったわ」

さっきまで自分の年齢を誤魔化そうと思っていたが、「関係ない」と強がる彼を試したかった。本当に、関係ないか。

「俺、もうすぐ二十二歳になります。で、さっきの答えですけど、フェチじゃないです。って言うかー、主婦なのかやっぱり。そうじゃ無いと良いけどって、思ってたけど」

「嫌でしょ？」

「物事が複雑になるのが嫌なだけで、それ自体が嫌って訳じゃないかな。嫌ってより、しょうがない。ですよね？」

「そう、しょうがないわね」

最近の若い子は、随分合理的に考えるもんだ。何だか悲しいような、楽なような、変な気持ちになった。

「後悔したり、自分を責めたりしないでくださいよ」

帰り際に、彼が私の心を見透かしたように言うから、少しだけ彼が逞しく見えた。

「ええ、分かったわ」

「俺、聡です」

「私、ゆ、祐子です」

思わず、偽名を使ってしまった。若い子と、こんな関係になってしまったことへの罪悪感。そして、全く違う自分になりたかったから。

◆十一月二十一日◆

そう言えば私達は次の約束もせず、彼の電話番号も聞かなかった。それとも次の約束を口にしなかったことは、つまり……、一回きりの関係ということだろうか？彼の職場にホイホイと行くことは、野暮だろうか？

「おばさん、そんな意味も知らないの？」

そう言う顔で見られるだろうか？不思議と後悔や、まして自分を責める気持ちにはならなかった。それよりもっと違う感情が溢れて来る。女としての自信？それに近い、でも、もっと、もっと、ドス黒い感情。ああ、言葉では表せない！

子宮からジワジワと生暖かいものが上がって来て、鳩尾辺りを擦るのだ。そのモヤモヤした気持ちが我慢できず、彼の働くコンビニの前で待ち続けた。

「何してるんですか？」

古びたダウンジャケットの彼が、車の中を覗き込んでいた。

「良く分かったわね」

「この車の色、目立ちますから。ビックリしました。もう、俺に会いたくないのかなって思ったから」

「貴方、次の約束を口にしなかったから、会いたくないのかと思って」

「だって。祐子さんは既婚者でしょ？俺が会いたい！って、言える立場じゃないですよ」

「取り敢えず車に乗らない？寒いでしょ」
「会いたかったです」

車に乗り込んだ聡が急に真剣な顔でそう呟くから、私は彼に吸い寄せられるように口吻た。

何度も、何度も…。

フロントガラスが曇るほどに。

母の嫉妬1

：
◇
：
◇
：

大学に入学して暫く経った頃、父の家にあの絵を取りに行った。父が家にいて、新しい女も遊びに来ているだろう、日曜日に。

玄関を開けると、今まで聞いたことのないような父の笑い声が聞こえた。チリチリチリ……、女の笑い声は高い。そして、余り若くないようだ。

玄関先に揃えられた黒いパンプスと、学生しか履かないような汚いスニーカー。父の女性遍歴からすれば、今度の女はちょっとタイプが違うようだ。ドスドス……、わざと足音を響かせてキッチンへ向かった。

「繭美どうしたんだ？連絡も無しに」

父が困惑した顔で、私を見つめる。

「私もパパの歯科医院のように、予約してここに来なくちゃならないの？」

悲しそうな顔で言ってやったら、父は何かモゴモゴと言いかけて、結局止めてしまった。ふん、情けない男。

「誰？この人達」

「お嬢さんですね？」

小太りの中年女が、台所で母のエプロンを掛けて立っていた。その横で、冷蔵庫からビールを取り出す若い男が振り返った。

「初めまして、柏木祥子と言います。この子は、息子の聡です」

「こんにちは。初めまして」

彼が勢い良く頭を下げるから、私もつられてしまった。

「娘の繭美だ。大学に入学したばかりなんだ」

「初めまして……、聡さん……」

聡？思わず反応してしまうほど、母の日記の世界に私はどっぷり浸かっていた。反射的に、母の日記の聡に関する情報が頭に浮かぶ。黒目がちな目、クシヤクシヤの髪……。私の険しい視線を受けると、聡は困惑したような顔で髪を掻きむしった。

「お前、何か用があつて来たんじゃないか？」

「玄関の絵、ママのお気に入りだったみたいだから、お祖母ちゃんの家を持って行こうと思って」

玄関の絵。と、態とらしく声を張り上げる。そして聡の表情を盗み見た。彼は素知らぬ顔で、ビールを飲んでいる。

「じゃ、あれ取って帰るから」

「分かった、お義母さんに宜しく言って」

父は私の大学のことも聞かず、サッサと帰って欲しいようだ。まるでこの女と聡が、本当の家族みたいじゃないか。父のその態度が、私を一層意地悪くさせる。

「お祖母ちゃんには、パパとご飯を食べて来るから夕飯はいらないって言って来たんだけど。邪魔みたいだから、帰るね」

「あらあらお嬢さん！お口に合うか分からないけど、私が夕飯をこさえてますから。どうぞ、一緒に。ねえ先生？」

女がエプロンで手を拭き拭き、台所から飛び出して来た。如何にも家庭的、と言った雰囲気漂わせて。

「食べて行けよ」ぶっきらぼうに言う父。いい気味だ。

「じゃあ、ご馳走になります」

私はムカムカしながら答えた。ここは私の家だ。ご馳走になるもへったくれもない。

台所から、甘辛い香ばしい匂いが漂って来る。私は聡にビールを注ぎながら、ずっと観察していた。もし聡が、母の日記に登場する「あの聡」なら、玄関に入った途端にここが誰の家なのか分かった筈だ。分かってながらこんな淡々と父と語れるのなら、日記に登場する聡ではなのか。そもそも、名前が同じだけでそう思うてしまう、私がおかしいのか。

「聡さんは、お仕事は何してらっしゃるんですか？」

「この子はフリーターなんて言って、定職にも就かず困ったもんなんです。何かやりたいことがあるみたいで……」

母親が台所から助け船を出した。でもその声のトーンには困っている感じは無く、それどころか、夢を追っている息子を誇りにさえ思っている節がある。

「やりたいこと？」

「絵を描いてるらしいよ」

今度は父が、代わりに答えた。

「今時、自分のやりたいことを貫ける男なんて珍しい。頼もしいじゃないか」

「そうでしょうかねえ？」

母親のわざとらしい困惑顔に、私は苛つきながらビールを煽る。

「お前未成年だろ？調子に乗るなよ」

「少しくらいだったら大丈夫ですよ、ね、繭美さん」

「ママに似て、私はアルコールに強いんです」

気まずい沈黙。自分の言葉の影響力を確認すると、私は更に饒舌になる。

「聡さん、玄関に飾ってある絵。どう思いますか？」

「え？」

「プロからみてどうなんですか？ママは、気に入ってたみたいですけど」

「参ったなあプロなんで。あれ、僕の絵なんです。昔、駅前や商店街で売ってまして。ここの奥さんにお買い上げ頂いてたなんて……。恐縮しちゃいます」

そう言って髪をクシャクシャに掻きむしるから、私は興奮を周りに悟られないように唇を噛む。ビンゴ。

「そうだったのか…。こりゃ、面白い偶然だなあ」

父はすっかり忘れてる。

「お友達の息子さんの絵」と、母が嘘をついてたことを。つまり父は、聡が母と関係があったことを知らずに、その母親と付き合っているのか？なんて間抜けな男。そしてなんて悲劇で、喜劇。

「まあ。こんな立派なお宅に、飾って貰うような絵なんですか？」

「母にはそれだけの価値が、あったんじゃないですか？理由は分からないけど」

一々しゃしゃり出てくる母親に、聞こえるような大きな声で言っちゃった。そう、一つの大きな理由が、母にはあったのだから。

女の料理は、味の濃い田舎の料理を思い出させた。母の手の込んだ西洋風の料理に比べると大雑把で不味いの、父も聡も美味しそうに食べている。父なんか今まで見たこと無い食欲を見せて、里芋の煮物を掻っ込んでいた。

「こんな家庭料理、お嬢さんの口には合わないんでしょ？」

「我が儘に育ってるから……」

父が憎々しげに呟くから、私は苦手な魚の煮付けを食べ始める。赤い鱗と白っぽい目玉が気持ち悪い。どんどん口に詰め込む私を、女は心配そうに、聡は面白そうに見ている。父は、私のことなど全く気にしてない。自分の家なのに、客さん扱いされるなんて……、なんか笑える。

「大学の方は、どうなんだ？」

気まずい沈黙に堪えかねた父が、今更どうでも良い質問をする。

「順調だよ」

「専攻は何なの？」

急に聡が、子供を相手にするような話し方になった。私は自尊心を傷付けられて腹が立って、

「英文科です。特に、夢や信念が無いもんで」と、つい、嫌味が出た。しかし、善良で鈍感な彼等は、その部分を静かに無視した。

「あら聡も高校の時一年、ロンドンに留学してたのよ。主人が亡くならなければ、大学も行かせてあげられたんだけど」

「まだ若いんだ。聡君がしたいことには、私がサポートするから」

父がいきなり良い人に変身したので、びっくりした。この人も優しく思いやりのある言葉を、他人に掛けたりできるんだ。それもこれも、この女を愛してるからか？確かに母より穏やかで、明るくて、抱擁力がある。男はこんな女といると、癒やされるんだろうか？

「僕が送って行きます」

私が帰る。と、腰を上げると、聡がそう言って、当然のように立ち上がった。

「僕、ビール殆ど飲んでないから、車運転できるし」

「聡、大丈夫？」

「アルコールは、もう醒めたよ」

「聡君すまない。そうしてくれるかい？」

「タクシー拾って帰るから、いいです」

私は慌ててその申し出を拒否した。気まずいドライブをしたい気分

ではない。

「この辺はタクシーが通らないから。聡、送って差し上げて」

この辺はタクシーが通らないから……、と、反射的に口に出すこの女は、母が亡くなってからどれだけここに通っているんだろうか？

「無理して魚を食べたんでしょ？」

玄関を出た途端、聡が悪戯っぽく聞いて来た。私はあの魚の気持ち悪さを思い出して、吐きそうになる。

「大丈夫です」

「本当に？」

真新しいジープのドアを開けて、聡が私を恭しく中に促す。このジープは、汚いスニーカーを履くフリーターの聡には立派過ぎる。私の顔色を読み取った聡が、先回りして答えた。

「中古だよ。金貯めてやっと買った」

嬉しそうな笑顔。母はこの笑顔を愛したのか？私は強張った顔で、視線を逸らした。

「繭美ちゃん、お袋とお父さんのこと嫌なのは分かるよ。だって君のママが亡くなってまだ二ヶ月位だし。家に上がり込むのは良くないって、俺もお袋にも言ったんだ」

「でも関係ないでしょ？貴方のお袋さんには」

「君のパパも、寂しいんだよ」

「寂しいのはあの人だけじゃない。あの人はまだ妻を持てるけど、

私は二度とママを持てない。お祖母ちゃんも二度と娘を持てない。あの人だけが、特別みたいに話すのは止めて下さい」

「ごめん、無神経なこと言って」

「それに、あの人はママをずっと裏切って来たんですから」

「そのことについては、何も言えないけど……」

私は呆れた顔で、聡を見た。自分だって同じことしてた癖に、と。だけど聡の顔が余りにも真剣で同情に溢れていたから、その尖った言葉の先が折れてしまう。

「その、お袋も色々苦労して、今回の男、いや、君のパパは良さそうな人だから。その、親不孝な息子としては、幸せになって貰いたい訳で」

「だからその幸せを妨害する私を、何とかしたいんですね」

「まあね」

「正直なんですね」

ムカムカした。どいつもこいつも自分のことしか考えちゃいない。苦労した母親なら、不倫も許されるのか？相手の奥さんが死んだら図々しく家に入り込んで、ベタベタ母の物に触りまくって。そんなことが許されるのか？不幸な経験した人は、何でもありなのか？私の頬が怒りで膨らむのを見ると、聡はそれ以上話さなかった。

「でっかい家だなあ」

祖母の家を見上げた聡が、無神経な声を上げた。それに他意はなかったかも知れないが、その夜の私は悪意の塊だった。

「裕福で不幸なんて知らない私は、我慢しろって訳ね」

大きな音を立てて車のドアを閉めると、聡が面白そうに笑った。

「君って本当に綺麗なのに、良くそんな意地悪なこと言えるねえ」

容姿のことを言われて、益々イライラして来る。

「さようなら」

「じゃ携帯の番号を教えとくから、連絡してよ」

「要りません」

そう言う私の手にメモを握らせて、彼は去って行った。

母の日記には、段々と深い関係になって行く聡との関係が赤裸々に書かれていた。私は嫌悪感を感じながらも、それを読み進むのを止められなかった。

二人の關係に少し変化が見られたのは、二年目に入ってからだった。それは自然な成り行きにも思えたし、そんな風にしてしまったのは母のせいのように思えた

母の嫉妬2

◆八月二十日◆

夫はグアム、繭美はお友達と北海道に行ってたから、この四日間
は聡のアパートで過ごしていた。けれど、二人とも今夜には戻って
来る。自宅に帰らなければならなかった。

私は聡を、古く汚いアパートから新築のマンションに引っ越しさ
せた。費用は全部、私が出した。

最近の聡は、愛人業が板に付いてきた。アルバイトも休みがちだ
し、私にお金を出させるのに慣れて来たどころか、お金が無ければ
平気で「頂戴」と言う。

唯一の救いは、絵だけは描き続けていることと、セックスに手抜き
しないことだ。そりゃ何も持って無い聡にとっては、体を使っ
ての
ご奉仕しかできないのだし、また時に必死になっている姿は可愛ら
しくもあるから、私も言われるままにお金を出してしまう。

「今度、個展を開かないかって言われてるんだ」

雨が降ってるから。と、言う理由だけでアルバイトを休んだは聡は、
私の作ったパスタを、美味しそうに啜っている。

「貴方は私達の関係をどんな風に考えているの？」

彼の反応を気にしながら、そう聞いてみる。この質問を口に出すま
で、何度も何度もシミュレーションを行った。深刻になり過ぎず、
重くならず、軽く、明るく……。この質問をすることで、喧嘩にな

るだろうか？聡が嫌がるのは、目に見えていた。けれど、どうしても聞かずにはいられなかった。

「どんな風にとって？」

「つまり、将来のことよ」

「将来？」

聡はパスタを喉に詰まらせて、慌てて水に手を伸ばす。

「私達、もう二年もこんな関係が続けてるじゃない？」

「そうだけど、ちょっとびっくりしたよ。そんなこと考えてるとは思ってなかったから」

「聡は時が来たら、私を捨てるんでしょ？」

言い出したら感情の歯止めが効かず、つい、結論から口にしてしまった。なんて醜い、憐れな女なんだろう。

「じゃ祐子さんが家庭を捨てて、僕とずっと一緒に暮らす？僕はいいよ。祐子さんがここに住んでも」

悪戯っぽい上目使いの瞳。私ができないことを、知っている目だ。

「お金が無い私と、暮らして行けるの？」

「さあ、どうだろうなあ」

聡が馬鹿にしたような口調で言うから、

「真剣に答えてよ！」と、思わず大きな声を出してしまった。

それでも聡は、肩を竦めてにやついた顔のままだ。こんな時、キッチンに走って庖丁を掴みそうになる。衝動的に男を刺してしまう、

女の気持ちが良く分かる。

聡はこの二年間、「好き」だと言ってくれたことがない。好き、愛してる、そんな陳腐な台詞が欲しいのか？違う。私は今まで、誰にも言われた事がない。私はただ、価値のある女になりたいだけなんだ。

：
◇：◇：

商店街の小さなギャラリースペースで、聡が個展をするのを知ったのは偶然だった。

駅の掲示板に貼り付けてあった手作りポスターに、聡の名前を発見したのだ。

私は母の日記を読みながら、聡に対して憎しみを募らせていた。女から金をせびって平気でいられる、負け犬。母の代わりに、復讐をしたい！そんな気持ちが、日に日に強くなって行った。

「五百円です」

変な機械音を立てるドアを開けると、入り口に座っていた女がそう言った。

「お金、取るんだ」

ガムをくちやくちやと噛みながら、女は不遜な態度で私を仰ぎ見る。こんなギャラリーには似合わない、赤い髪の化粧が濃い下品な女だ。まるで、昔のパンクシンガー。

「五百円ですけど？」

私は観念してお金を渡して中に入った。油絵の具の香りが漂う部屋に所狭しと飾られてるのは、抽象画と言われる類の絵だった。

「あれ、繭美ちゃん？来てくれたの？お父さんに聞いたの？」

聡が大袈裟な仕草で、奥から現れた。

「嬉しいなあ。嫌われたと思ったから」

「別に、好きじゃないけど」

私は冷たく言い放つ。一度会っただけなのに、急に馴れ馴れしくなった聡にも腹が立った。

「私、高校時代は絵画部だったから。絵は詳しいんだ」

「そうだったんだ。誰の絵が好きなの？」

「――ロートレック、かな」

「ムーランルージュの画家だね？彼の絵の何処が好きなの？」

「絵じゃない。私は彼の愛人になりたかったの」

「過激なことを、言うんだね」

彼は困ったように、頭を掻いた。

「彼は子供の時に馬から落ちて足の骨を折って以来、成長が止まっちゃったんだよね。自分のことを小瓶ちゃんと呼ぶなんて、達観してるって思わない？」

「分からないな……」

「何が？」

「繭美ちゃんが、ここに来た理由だよ。僕の絵が観たかった訳じゃないでしょ？」

「私、貴方を不幸にしたいの」

「どうして？」

「私が不幸だからよ」

聡は一瞬驚いた顔をしたが、直ぐに優しい、余裕の笑顔に戻った。

「——いいよ」

「え？」

「不幸にしてもいいよ。って言っても、僕って楽観的だから、不幸にするのは難しいと思うけど」

「ふん」私は鼻で笑う。その強がり、いつまで保つか。

「いい人ぶらないでよ。私は貴方のこと、よく知ってるんだからね！」

「よく知ってる？さぞかし悪い噂なんだろうね。そんなに怨まれているんだから」

「ここを借りるお金どうしたの？今度のスポンサーは、何処の奥さん？」

「——ごめん、何言ってるの？ここのオーナーが知り合いで、安くして貰っただけだよ」

その時また例の機械音がして、聞き覚えのある声が出た。

「繭美？お前も来てくれたのか？」

父が例の女を連れて、満面の笑顔で立っている。女が着ている麻の

スーツの皺が、彼女をますます見窄らしく見せていた。

「繭美ちゃんは、僕のポスターを観て、来てくれたみたいです。入場料まで払ってくれて、申し訳なかったです」

「そうかそうか。そりゃ散財させたな」

父が財布から一万円札を抜いて私に渡す。お金でしか感情を表せない、可哀想な男。

「繭美さん、わざわざありがとうね」

小太りの女が、人の良さそうな笑顔で私にぺこぺこ頭を下げた。ああ、面倒臭い。

「すみません。僕は繭美さんをそこまで、送って来ますから」

聡はそんな母親を見ると、私の背中を押した。どうやら、ギャラリ―の外に出ろという合図らしい。

「お袋の前で変な話は止めてね。僕は君が思っているような、悪い男じゃないよ。分かってくれると、嬉しいんだけどな」

そして私の頭を、子供のように撫でる。

「だって僕達、兄妹になるかもしれないんだからさ」

「馬鹿じゃないの！」

吐き捨てるように言って、その手をはねのける。

「そんなこと、させる訳ないじゃん。邪魔してやるから」

「困ったなあ……」

拒否され行き場をなくした聡の手が、いつものように髪をクシャクシャと掻きむしった。

「相当嫌われてるんだなあ」

「貴方が思ってる以上にね」

もっと、もっと、聡を傷つけたい。けれど私が毒を吐く度に、聡は余裕の表情で笑うのだ。

——分からない。何故母は、私には愛情を感じなかったのに、他人の聡をあんなに愛したんだろう。私の存在は……、母にとって、一体何だったんだろう？

◆九月十五日◆

聡がアルバイトから帰る前に食事の用意をしようと、久しぶりに彼のマンションに行った。すると、私の化粧品や洗面道具が、全てクローゼットに押し込まれている。

直感で、女だと思った。

まだ聡は若いのだ。私も彼が望む時に、ここに来れない。既婚者の私が、聡を責めるのは筋違いなのだ。分かってる。分かってる。分かってる！

でも頭に血が上って、部屋中を探さずにはいられなかった。その女の痕跡を……。

そしてついに、ゴミ箱に使用済みのコンドームを発見した。膝が

ガクガクと震え、その場にしゃがみ込む。

私が選んだブルーのシルクのベッドカバー、素肌で横たわるととても心地良かったのに！そこで、聡が他の女を抱いた？

急いでシーツを剥がし、ゴミ箱に力任せに突っ込んだ。フロアにぞうきんを掛けて、お風呂も念入りに磨き上げる。その薄汚い女の痕跡を、早く消したかった。

掃除が終わると、怒りが溢れて来る。私がお金を出してるこの部屋で、私が選んだこの家具で、あのベッドで、聡が他の女を抱いた！その現実には、押しつぶされそうになる。

私は聡に、ラブホテル用意してあげただけのか？こんな所、直ぐに解約してやる！聡なんか、浮浪者にでもなればいい。

次に、自分の馬鹿さ加減に、涙が流れて来る。信じた自分が馬鹿だった。

馬鹿、馬鹿、馬鹿。

「友達に部屋を貸したんだ。親の家に住んでる貧乏フリーターには、ホテル代は高すぎるって」

「――そうだったの？」

「ほら」

帰って来た聡は、そう言ってワインを差し出した。

「このワインは、高いのよ」

「そいつん家、酒屋だからさ。お礼だって」

私は安堵感から、ふーっと体の力が抜けた。

「祐子さんどうしたの？あれ？シート捨てたの？」

「私、貴方に他に女がいるんじゃないかって……」

「え！？」と、聡は大袈裟に驚いて見せた。

「ここまで祐子さんにして貰ってるのに、他の女を呼べると思う？」

口吻から、少しのアルコールを感じる。

「飲んで来たの？」

「バイトの帰り、同僚と自販機で缶ビールを飲んだんだよ」

「車なの？」

私は言われるままに、聡の知り合いが経営するオートショップで先週ジープを買ってやったのだ。

そう言えば、長い髪で清楚な感じの女がいた。確か、亜矢香……。彼女と聡が隅で親密そうに話していたことを、今更のように思い出した。

「一缶だけだよ」

聡が急に不機嫌になったので、私は慌ててキッチンに向かい料理を作り始めた。聡をこんな風にしてしまったのは私。

でも、女は不思議だ。女はそれが真実だから信じるんじゃない。

理屈じゃなく、信じたいから信じるんだ。

母の嫉妬3

：
◇
：
◇
：

和之から連絡が来たのは半年振りだった。母が死んだ直後に一方的に去って、梅雨のじめじめした蒸し暑い日に、また不快なメールを寄越してくる。和之らしい。私達の関係には、春のほのぼの感や、秋の爽涼とした風は似合わない気がする。

「繭美ちゃんに会いたい。会いたい！会いたいよう！」

年齢に似合わない幼稚な文面に苦笑しながら、私はこう返信する。

「いいよ。会っても」

「やった！本当？本当に？」

和之にお願いしたいことがあった。私はずっと和之の思い通りの人形に徹して来たのだから、少しは見返りを要求しても許される筈だ。

久しぶりに会った和之は、腹回りに肉が付いて中年の匂いを漂わせていた。

「毎晩家に真っ直ぐ帰って、愛妻料理を食べてたらさあ、ちょっと太っちゃってさあ」

「愛妻？」

意地悪く聞き返す私に、「言葉のあや」と戯ける。私はこんな軽い男とは、絶対に結婚しないだろう。奥さんに、同情する。同情すること、優越感を感じたいだけかも知れないが。

「奥さんの写真とかないの？」

「ほら」と、携帯の画面を見せられた。

ははあ、と、納得する。鈍そうな女だ。

「あ、繭美ちゃん。こいつのこと、ブスじゃん。って思ったでしょ？」

「別に、関係ないし。どうでもいい」

和之は少し会わない内に、甘えキャラに変貌していた。それは奥さんという安心できる母親を得たからかも知れないし、元々そういうモノを持っていて、今まで虚勢を張っていただけかもしれないかった。どちらにしろ、私の和之に対する未練は、すっかり消えてしまった。

「で、お願いって？」

「絵を買って欲しいの」

「絵？誰の？」

「柏木聡って人の」

「有名なやつなの？俺は知らないんだけど」

「私も良くは知らない」

「ふーん」と、私を探るように見ていたが、

「繭美ちゃんが俺にお強請りするようになったなんて、ちょっとシ

ヨックだなあ」と、
また戯けて誤魔化した。でも、何故絵を買って欲しいのか、しつこく聞いてこないのは大人の余裕。

「和之さんに求める物が、違って来たんだよ」

冷静に言い放つと、意外にも和之はシリアス顔になった。

「そういう風にしちゃったのは、俺だもんね。いいよ。買ってあげる」

和之がギャラリーのドアを開けて、その不快な音に眉を顰めるのと、聡が私に気付いたのは同時だった。何かを感じ取った和之が、「そう言うことか」と、私の表情を盗み見る。

「始めまして、柏木です」

「あ、どーも」

反射的に名詞を差し出す和之は、如何にもサラリーマンっぽい。名詞は、有名な証券会社のものだ。私はそういった和之の表の顔に、今まで関心がなかった。

「私は絵画など、全く分からないのですが……、君はどの絵が気に入ったの？」

君？クスリ、と笑う。さっきまでは「繭美ちゃん」って呼んでいたのに。

「これがいい」

菊なのか百合なのか、白い花が描かれた小さな絵で、タイトルは「献花」だった。

「じゃあ、これを戴きます。幾らなんですか？」

躊躇する聡の代わりに、受付の女が叫ぶ。

「号、三万だよ！」

「号？」

「キャンバスのサイズです。この絵は一号サイズだから、三万円なんです」

聡は照れて頭を掻いた。その仕草を和之が、薄気味悪く眺めている。

「じゃあ、あの絵は幾らなの？」

私は、一番大きな絵を指差した。

「あれは三十号だから……」

「九十万ってこと？ 売れるの？」

「売約済みの札が付いてるじゃん！」と、例の女が、私の背後で意地の悪い声を張り上げた。

「絵には価値があって無いようなもんなんだよ。この絵を一億円で買う人がいりゃ、この絵は一億円の

価値。聡、値引きなんてしちゃ駄目だよ！」

言いたいことだけ言わずに、さっさと受付に戻って行く。

「カズミ、分かってるって」

「私は値引きなんて要求しませんから、ご心配無く」

和之が大人しくお金を払い、私はその小さな絵を受け取った。

「ありがとう繭美ちゃん」

聡は本当に嬉しそうに、ペコリと頭を下げる。

その時だった。あの匂いを嗅いだのは。振り向くと、そこには真っ白な百合の花が咲いていた。女は一瞬にして、自分の敵になる女が分かるんだ。

「亜矢香さん！」

純白のワンピースが、眩しく私の目に飛び込んで来た。私は意識的に背筋を伸す。決して美人じゃないけど、内面の清らかさは外見に表れる。そこに男は惹きつけられるのか？聡も、そんな一人なのだろうか？

「近くに来たから……」

頬を上気させながら、弾むように言う亜矢香。年齢は私より上のようだけど、精神年齢は低い。絶対に、処女。ふん、と、鼻で笑う。こんなお嬢さんが、どんな用事で廃れた商店街に来たんだ。嘔吐きめ。

「どの絵をお買い上げくださったんですか？？」

首を傾げるその仕草に苛つきながら、「貴女に何の関係が？」と強

い視線を返すと、途端に青ざめた。

「不躰に聞いてしまつて御免なさい。つい、嬉しくて」

助けを求めるように、聡の顔を仰ぎ見た。その仕草が余りにも健気に見えたからか、

「献花ですよ」と、和之が代わり答えた。

「あの絵！聡さんお売りになったんですね」

そう言つて、慌てて口を塞いだ。

「私、また余計なことを。父にも良く言われてたんですよ。良く考えて、話せて。お喋りだって……」

「実はあの三十号の絵、亜矢香さんのお父様が買って下さったんだ、亡くなる前に」

「――私、両親がもうおりませんの」

おりませんか？何語？私は改めてその絵を見つめ、タイトルに納得する。

「野望」

寒色系の渦の中に、一筋のオレンジ色の光が差している。その光は、釈迦が罪人に垂らした最後の希望、あの「蜘蛛の糸」のように輝いていた。聡にとっては亜矢香が、この光なのか？いや、亜矢香の父親が？

「献花、あの絵に何か思い入れがあったの？」

「最近亡くなった知り合いの為に、描いたもんだから」
「――最近亡くなった？」

私の声は、自然と上擦る。

「恩人だった……」

「恩人？」

「何も返せないまま、急に逝かれてしまつて。本当に急に……」

私の探るような視線に気付いた和之が、柔らかく背中を押した。それは、私を正気に戻す合図。

「そうだ！行かなきゃ！私達、これから予定があるの」

和之の腕に自分のそれを絡めると、亜矢香が頬を染めて恥ずかしそうに俯いた。

「お似合いのカップルですね。聡さんもそう思いませんか？」

「――ええ。お似合いです」

そこを出た私達は、互いに苦笑いで見つめ合う。

「亜矢香とかいう女、馬鹿だよ」

「女は少々馬鹿で良いんだよ。頭の良い女じゃ、浮気も直ぐばれる」

そうやって私を抱きしめて、唇に軽くキスをした。ニヤリと笑う和之と、挑発的に微笑む私。確かに、お似合いかも知れない。

◆十一月十日◆

あの部屋には、女の気配がある。シーツを捨てた日から、聡は巧妙にそれを隠すようになったが、私には分かる。女にはそれが分かるように、予め力が備わっているんだ。

いつものように散らかし放題だが、マットレスには掃除機を掛けた痕跡がある。急いで掃除機の中を調べると、長い髪の毛が見付かった。勿論、私の物では無い。

シーツに掛けられた大量の男物のコロンは、女の痕跡を消す為の物だろうか？

一つ疑い出すと、全てが怪しく感じる。私は必死になって、見えない女の影と戦っていた。

ああ、最近なんだか疲れる。心も体も疲れ果てて、神経がギシギシ軋む音が聞こえそうだ。

そう、最初から分かっていた筈。若い男に恋をすると言うことは、つまりそう言うこと。嫉妬、嫉妬、嫉妬。決してなくならない、若い女達への嫉妬。私が二度と手に入らない物を持ってる女達への嫉妬。

彼が一つ年を重ね私に近づく度に、私は一つ彼から遠ざかる。決して埋まらない、その溝。いつか、聡を失う、恐怖。嫉妬とその恐怖の間で、私はいつか気が狂う。

——そう言えば、処女の血を浴びて、若さを保とうとした女王の話を読んだことがある。彼女も若い男に恋をしたのだろうか……。悔しい。私に繭美の若さと知恵があれば、聡を夢中にさせて翻弄することができるのに。

繭美には年の離れた、大人の彼氏がいるようだ。夫は心配して外出禁止と怒鳴ったが、大人の男なら逆に間違いを起こすこともない

だろうと、ほっとした。男親と女親では、こうも受け取り方が違うのか。それに、こんな両親の子供だもの。品行方正と行く訳ないじゃない。

夫が繭美を「帰りが遅い」と叱りつけているのを見て、思わず笑いそうになってしまった。そんな自分は、帰りはいつも朝方じゃないか。勝手な男。馬鹿な男。

——死ねばいいのに。

◆十一月三十日◆

聡が女と一緒にの所を押さえてく、私は予告無しにマンションへ行くようになった。その度に、聡は不機嫌になる。当然だ。こんな中年の女にいつも監視されているのだから。うんざりするだろう。けど、そうしようもない！自分を押さえられない。

「確かにここは、祐子さんに払って貰ってる。だからって、監視みたいな真似は止めてもらいたいんだけど。結構、ストレスだよ」

そうやんわり抗議されても、私は止めなかった。いや、止められなかった。

今日、聡の働くコンビニを通ったら、彼の姿が無かった。出勤日の筈なのに……。嫌な予感がした。

鍵を開けるのもどかしく、私の形相に驚いた聡を押し退けて寝室に直行する。

「祐子さん、どうしたの？」

無言でブランケットを捲り、シーツを確認した。勿論、ゴミ箱の中も。

「祐子さん、もう止めてよ！」

「煩いわね！」

寝室で、目的の物は見付からなかった。足早に、リビングに移動する。

本当は、恐ろしかった。女がいる証拠なんて見たくない。見たくないけど、その証拠を探さずにはいられない。

「さーとーしー。ママが来ちゃったの？」

スーパーで会ったあの女が、体にタオルを巻き付けた姿でビールを飲んでいる。そのビールは、私のお金で買ったもんだ。勿論、そのタオルだって。我慢できない熱い感情が溢れて来て、私は脱ぎ散らかしてあった洋服を彼女へ投げつけた。

「ちょっとオバさん！何すんのよ！」

「出て行きなさい！早く！」

「ちょっと、聡！どーなってんのよ。この人、どうしちゃったの？」

「カズミ、今日の所は帰ってくれ……」

女は観念したようにノロノロと服を着て、ぶつぶつ文句を言いながら出て行った。

「何て男！」

聡の頬を殴りつける。一度それをしてしまうと止めることができなくなつて、何度も何度も拳を振り落とした。

「――祐子さん」

聡がゾツとするような冷たい声で名前を呼ぶから、私の体は凍つたように動けない。

「どうして？ 私は聡に一生懸命に尽くして来たじゃない？ 聡を私だけの物にするには、どうしたらいいの？」

「祐子さん。カズミとは、関係ない。ただの幼馴染みだよ」

「嘘！ 何で嘘吐くの？ 聡には他に女がいるんでしょ？ 言いなさいよ！」

「みつともないよ。大人の女の嫉妬は。それじゃ十代の女の子と同じじゃないか。寧ろ…、十代の女の子の方がドライかもしれないよ」と、私の体を乱暴に押し退ける。

「聡……」

「そろそろ限界かな。祐子さんの相手をするのも」

「あゝあ」大袈裟に溜息を吐いて、ソファ―に体を投げ出す」

「聡が悪いのよ！ ここに他の女を連れ込むなんて！ ここは私と貴女の二人だけの部屋なの！ 二人だけなの！」

彼の膝に縋り付くと、私は泣きながら懇願した。

「お願いだから、私だけの聡でいて」

「もう無理だよ。俺には、自由がない。祐子さんに、飼い殺されるのは嫌だ！」

聡は私を振り払って勢いよく立ち上がると、荷物を纏め始めた。

「お願い止めて！」

「もう無理なんだって！」

「いいわ！」

そして私は、決して口にはいけない言葉を吐いてしまった。

「何でもする！何でも許す！だから行かないで！聡の自由にしていから！だから、お願い！」

「――本当に？」

彼は私の涙に濡れた瞳の奥を、探るように見つめる。

「本当よ。だから……」

聡に息が詰まる程に、強く抱きしめられた。ああ……、吐息が洩れる。こうして聡に抱きしめられていたいだけなのに。

「ありがとう！祐子さんはやっぱり最高だよ！スキだよ」

――好きだ。その言葉の為に私は大金を注ぎ込み、プライドを捨てる。彼にその価値はあるのか？今はもう、分からない。

でも、ここで止められない。だって……。ここで止めたら、私が聡に費やした二年間が無駄になる。それを言うなら夫と私の二十年は一体何だったんだ？

愚か……。愚かな私。

母の喪失1

：
◇：◇：

久しぶりの和之とのホテルだったけど、和之はご機嫌斜めだった。

「昨夜、メールを返してくれなかったね。どうしたの？何してたの？」

「サークルの友達と、カラオケに行って来たから」
「カラオケ？」

和之は私の服を器用に脱がしながら、訝しげに聞き返す。

「繭美ちゃんって、カラオケ嫌いじゃなかったっけ？」

「しょうがないじゃん。お付き合いなんだから」

本当は合コンで知り合った子と、会っていた。最近の和之は変な嫉妬をするから、私は下手な嘘を吐いたのだ。

「ふーん」

私の体を異動していた和之の唇が、グロスを塗ったように光っている。

「――嘔吐き」

その唇は、私の体液の匂いがする。女の私が、匂う。嘘だと気付い

て欲しくて、嘘をついた。何故だろう？和之の気持ちをかき乱したくなった。

「繭美ちゃんが俺に嘘吐くなんてさ、大人になって来たのかな？」

「私の成長は、和之さんが一番知ってるでしょ？」

「体は成長しても、心はまだ十三歳の繭美ちゃんのままだと思ってただけだな」

和之は、私の体を心地良くする術を知っている。でも、心を心地良くしてくれいから、私は満たされないままだ。私は、もっと満たされたい。もっと。

「和之さんは、奥さんと上手くいってないの？」

「いってるに決まってるじゃん」

「ふん」

私は正直に語ろうとしない和之に苛々して、悪戯心から昨夜の事をばらしてしまった。

「実は昨日は、合コンで知り合った子と遊んでたんだー」

「それで、――寝たの？」

鋭い視線で聞かれて、私は思わず目を逸らす。

「してないよ――」

それは本当だったが、和之のその執拗な態度が、日記の中に母を思わせた。体が、震える。

「じゃ、繭美ちゃんは、俺しか知らないんだ」

じりじりと、壁に追い詰められた。

「和之さんどうしたの？ 私なんか、使い古したバスタオル以下なんでしょ？」

「繭美ちゃんが他の男という所を想像したら、やばかった」

「やばかった？」

「年甲斐もなく、嫉妬した」

「嫉妬？ それって、執着？」

和之が、皮肉な笑みを浮かべて私を壁に押し付ける。私の体の自由を奪うことが、心を引き留める術だというように。

「それも愛の一種だろ？」

また和之の手が、ブラウスの中に滑り込んで来た。

「そろそろ時間だよ。帰らなくていいの？」

「明日の朝まで、一緒に居ようよ」

——気持ちいい。気持ちいい。誰かに必要とされるのは、気持ちいい。それが例え、歪んだ感情であっても。

祖母は私を自由にさせているけれど、それには何か理由があるようではない。時々、腫れ物に触るように言葉を選んで話し掛けて来る。

それは母を亡くして直ぐの私を氣遣ってるようにも思えるし、爆

発しそうな爆弾の線を選びかねてるようにも思える。青い線と赤い線、切るのはどっち？と言うように。そんな態度を取られると、私は益々イライラして爆発したくなった。

和之は前にも増して、私に会いたがるようになった。繭美ちゃん、繭美ちゃん、繭美ちゃん。まるで室内犬のように私の足に絡まる。祖母も、和之もどうかしている。何故もっと、普通に愛してくれないのだろうか。

父の誕生日が、近づいていた。あの女なら手料理で持て成すに違いない。考えてみれば、今まで父の誕生日を祝うことなど全く無かった。あの女の甘辛い料理を食べながら、父はその瞬間に幸せを噛みしめるのだろうか？少し前まで身を置いていた殺伐とした家庭と比べて、「ああ、今は幸せだ」と、満面の笑みを浮かべて思うのだろうか。勝手な男。勝手な父。私を憎しみの暗闇に投げ込んで、自分はぽかぽか陽気の縁側で、あの女と幸せを築くのか。許せない。私の怒りは、誰にぶつければいいのだろうか？ぶつける人はただ一人。聡しか、いない。

だから、「父の誕生日を祝う」と、あの小太りな女から手紙が届いた時、思わずニヤリとしてしまった。

「繭美ちゃん、手紙は誰から？」

「パパの誕生会のお知らせ」

「様子って誰？新しい女かしら？一周忌もまだなのに！」

「いいじゃない。パパだって寂しいのよ」

「それでも早すぎるわよ！」

勿論私にとっては、父が寂しかろうが、誕生日だろうが、どうだって良いことだった。父の誕生会に行く理由は、一つだけ。その会の

メンバー全員を、嫌な気持ちにさせる為だ。

「――え？ パパの誕生日のプレゼント？」

「和之さん、ワインを選んでくれない？ 私は全然詳しくないから」
すると、和之の目が怪しく光った。

「何を企んでるの？」

長い付き合いの和之には、隠し事はできないらしい。

最近の和之には、変な色気がある。大学まで車で迎えに来た和之を、友達は「セクシー」と評した。

「俺は昔からセクシーですけど？ 繭美ちゃんが子供だったから、分からなかったんだよ」

多分、私が和之と一緒に居たい理由はこれだと思う。和之だけが、私を子供扱いしてくれる。むかつくけど、心地良い。

結局お祝い事だからと、和之はクリスタルを買ってくれた。ドンペリじゃ俗っぽいし、ヴーブクリコじゃ地味過ぎると言いながら。

「アメリカじゃドンペリより、クリスタルの方が値段が高いんだけどさ。日本じゃドンペリをありがたがる。日本人の価値観って、俗っぽくてセンス無いよなー」

こんな蘊蓄を語る和之は、珍しかった。

「愚痴っぽくなったら、オヤジでしょ？」

何かあったと悟りながら、私はこんな冷たい言葉を発してしまう。
慰めてあげるような関係でもないし、そんな関係を拒否したのは和之だ。

「繭美ちゃんはきつついなあ。クリスタル、買ってあげたのに」

「和之さんも飲むんだからいいじゃない？」

「俺も、飲む？」

少し頭を傾げて考えた後、やっと合点が言った風で眉間に皺を寄せた。

「ダメダメ、俺を巻き込まないでよ」

「お願い」

「ダメ」

和之は力強く頭を振る。分かっていた。和之は私と、甘いクリームを舐めたいだけだって。

「どうしてもダメ？」

「君の問題に絡みたくない。正直、うざい」

「――あっそ」

けど、世の中そんな甘くない。和之だけ、甘いクリームを舐め続けられる訳がない。私は初めて、和之を追いつめる台詞を吐いた。

「じゃあ、私は今日から、作家になります」

「作家？何それ」

「私は十三歳で、彼の愛人になった。少女は幼い時からの性体験を、赤裸々に語った。どう？」

「好きにどうぞ」

「それを和之さんの会社と、奥さんの所に送る。どう？」

聡の個展で見た和之の名詞から、会社名は分かっていた。

「俺の家が何処か、知らないじゃん」

「いつだったか、結婚式の招待状がバッグから覗いてたよ」

「そっかー。じゃあ、降参するしかないかな」

和之は優しく笑った。それが余裕なのか、私を子供だと侮っているのか分からない。私は微妙な笑みのまま固まる。

「俺は繭美ちゃんに、何もしてあげたことないもんな。お願い、聞いてあげなきゃね」

「私、この洋服じゃ行きたくないの」

私は祖母の趣味で、上質な素材のブラウスとシンプルな黒のスカートを履いていた。上質なのは分かる。けど私は、質よりトレンドを重視したい年齢だ。

「まあ確かに。そのデザイン、古臭いもんね」

「私が輝いて見える洋服を、和之さんにプレゼントして欲しいの」

「洋服だけでいいの？」

「靴と、バッグも」

急に車がUターンした。

「じゃあ、俺が知ってるショップに連れて行くよ」

和之は怒らなかった。それだけ私を好きなのだろうか？少し、心が

痛んだ。

「男に物を強請っても、平気な顔をしてりゃいいんだよ。何故なら男は、頭の中でその見返りをちゃんと考えてるから」

その言葉を証明するように、ストッキングを履いてない私の足を撫で回す。

「ちょっと、運転気を付けてよ」

「人は正義より、悪に強く引かれるんじゃないかって思うんだ」

さりげなく本音を言う和之に、納得する。でも自分が悪なのか何なのか、分からなかった。そして何より、どちらにもなりきれない自分の青臭さが嫌だった。

私達を出迎えた父の笑顔が固まった。それは私の格好だったか、後に立っている和之だったか分からない。それか、両方か。

和之に連れられて入った表参道のショップで、私は完璧な「女」を演出された。胸元が大きく開いてフリルがついた黒のキャミソールに、ボロボロのデニムのミニスカート。ラインストーンが沢山付いたミュールに、繊細なビーズできたバッグ。何時も後ろで結んでいた髪は、下ろしてカールさせていた。

「――その、繭美は雰囲気が変わったな」

「もう十九歳だから」

「う、後ろの方は？」

「始めまして。お嬢さんとお付き合ってる、望月です」

和之の名字を久々に聞いて、私も柄にもなく緊張して来た。

「お付き合い、してるのか？」

「そう」

意識的に顎を上げる。

「そっか。――まあ、上がりなさい」

和之が柔らかく背中を押して、耳元に囁いた。

「ショックを受けてるね」

「そうだね」

ニヤリと笑う口元に、和之がキスをする。すると、洗面所から現れた聡と出くわした。

「望月さん？先日はどうも」

「いいえ、どういたしまして」

「繭美ちゃん？何だか雰囲気が変わったな」

私はグロスの光る唇を歪めて笑う。そう？とさりげなく。

「綺麗だなあ。なんか、女優さんみたい」

「大袈裟だよ」

聡の真っ直ぐな視線を受けると、何故か体が震えた。こんな風に、男の人から見つめられたことが今までなかった。

母の喪失2

「あら……」

リビングに入ると、優しい笑みを私に向けたのは、あの百合の女だった。

「先日は失礼しました。私、溝呂木亜矢香と言います」

――溝呂木？ 亜矢香がエレガントな物腰で頭を下げると、白いレースの付いたスカートの裾が可憐に揺れた。途端に自分が恥ずかしくなる。彼女が百合の花だとすれば、私は精巧に作られた模造の薔薇だ。

「繭美さん、いらっしやい」

台所から聡の母親が顔を出した。この女の頬はいつも血色が良く、私を苛つかせる。両手で運ぶお盆が、こんなに似合う女もそうないだろう。所帯臭い、田舎臭い女。

「料理を運ぶのを手伝います」

「あらあら、亜矢香さんにそんなこと……。聡、あんたが手伝って」想定内だと言うような涼しい顔で、亜矢香が聡にお盆を渡した。そして無邪気な表情を作ると、明るい声を張り上げる。

「先日お買い上げになった絵、何処に飾ったんですか？」
「ああ、寝室に――」

柔らかに微笑んで余裕の嘘をつく和之は、やっぱり私好みの男だ。

「和之君は、どんな仕事をしてるのかな？」

「父親らしい顔」を見せて、父が聞いた。

私はそんな父を苦々しく思いながら、和之の会社名を告げる。

「ほお。エリートなんだなあ」

「勿論じゃない。私の彼氏なんだもん」

そう言って態とらしく和之の腕にしがみつくと、負けじと亜矢香が聡へ体をすり寄せた。

「――繭美さんと和之さんは、本当にお似合いのカップルですね。お義父様」

「亜矢香さんと聡君だって、お似合いじゃないか。実は亜矢香さんと聡君、婚約したんだ。今日はその

お祝いも兼ねてるんだ。繭美、和之君。今日は来てくれて、本当にありがとう」

父が深々と頭を下げた。こんな父を見るのは始めてだった。

「――婚約？」

私の声は、自分でも慌てるほど悲鳴に近かった。和之がその声を掻き消すように、「おめでとう！」と手を叩き始める。

「ありがとうございます」

恥ずかしそうに頬を上気させる亜矢香の姿に、言いようのない怒り

を感じた。

「聡さん、お義父様が発表されたわ」

料理を運んで来た聡に、亜矢香は甘えた声でそう告げる。

「シャンパンにしといて、正解だったな」

和之がその美しい液体をグラスに注ぐと、父が感極まった声でスピーチを始めた。

「――皆さん。今日は集まってくれてありがとう。こんな暖かい気持ちには、久しぶりだよ」

まるで、母の存在を忘れたかのような口ぶりだ。母と一緒にいた時は、穏やかな気持ちにはなれなかったということか？それは、自分が悪いんじゃないか。

「さあ召し上がって下さい。お口に合うかどうか分からないけど」

テーブルに並べられた料理を見て、うんざりした。ちらし寿司に、鳥の唐揚げ。まるで子供のお誕生日会だ。そうだった。私はこの和やかなムードを、ぶち壊しに来たんだった。

「ママのローストビーフが、恋しいなあ」

私の呟きに、「繭美！」と、父が睨み付ける。

「いいんですよ先生。母親の料理を恋しがるのは、子供として当然ですもの。レシピが書かれたノートが残ってましたから、今度、頑

張って作ってみますね」

「こんな料理しかできない人が、ノートを見ただけで作れるかなあ？あれ、結構難しいから」

皆が私の言葉で、気まずく下を向く。父が睨み付けているのを感じるが、私は自分の目的を果たす為にここに来たのだ。手加減はしない。

「でも、繭美さんはお母様の手料理を思い出してお幸せね。私の母は小さい頃に亡くなったから、面影すら覚えてないんですよ」

ははぁ、これがこの女の手か。私と亜矢香には、「母を亡くした」と言う共通点がある。

だから仲良くしましょうか？

「繭美さんには、仲良くして戴きたいわ。親戚になるんだし」

「あんたが聡と結婚してなんで……」

言いかけて、その言葉の意味が分かった。つまり、父とこの女は結婚するんだ。私の顔色が変わると、亜矢香は慌てて口を噤んだ。

「私ったら、また余計なことを」

「――パパ、どういうこと？」

「今すぐ籍を入れるとか、そう言うことじゃない。それにお前にも、賛成して貰ってから……」

「賛成する訳ないじゃない！」

いきり立つ私の腕を、和之が掴んだ。

「今夜はお祝いの席だし、お父さんも先のことだと仰ってるだろ？」

和之の優しく諭すような声に、私は弱い。

「分かった…」と、唇を強く噛んで押し黙る。

「ところで…、亜矢香さんと聡さんの馴れ初めは？」

聞いた後で、和之が私の耳に囁く。

「この怒りは、後で発散させてやるから」

私はこんな和之が、やっぱり好きだ。私の感情をコントロールする術を知っている、和之が。

「私達は、昔は兄妹だったんです」と、亜矢香が唐突に語り始めた。今までの人生で亜矢香は、自分が主役で生きて来たのだろう。どんな場面でも、自分を語ることができるのは、いつもこうして周りが耳を傾けて来たからだ。

「僕の実の父が死んで、お袋は俺を育てることができなくなって。遠い親戚の溝呂木家に、養子に入ったんです」

「それでも法的には一応兄妹だから、結婚は——」

無理なのでは？と、和之が遠慮がちに言った。

「溝呂木の父が去年亡くなって、僕は溝呂木家とは協議離婚して、母の姓の柏木を名乗ることにしたんです」

「じゃあ亜矢香さんと結婚する為に、聡君は溝呂木家と離縁をしたんですか？」

「ええ、そうなります」

亜矢香がそんな聡に、幸せそうに寄り添う。

「それってちょっとした、兄妹プレイね！きもっ！」

「繭美！」

また、父が大声を張り上げる。亜矢香は私の言葉を聞くと、助けを求めるように聡を仰ぎ見た。しかし聡は、食べるのに夢中な振りを装っていた。聡は亜矢香を心からは愛していない。直感で、そう感じた。

「――溝呂木の父には、色々と世話になったんです」と、聡がしみじみ語った。

そうか、世話になった人の娘だから結婚するのか。

「では、繭美さんと和之さん、お二人の馴れ初めは？」

亜矢香に聞かれて、「塾の講師と生徒です」と心の中で答える。十三歳だった私に、一回り年上で塾の講師の和之が、手を出したんです。

「朝、満員電車の中で貧血で倒れた繭美さんを、こう、私が御姫様だっこしまして……」

嘔吐き。和之の話に笑う皆の声を、何処か遠くで聞いていた。

◇ … ◇ …

「――和之さん、今夜は泊まれるの？」

殺風景なシティホテルの唯一の救いは、夜景が綺麗なこと。けれど今夜は、窓をつたう雨ばかり。こんな日は、私と和之の関係がどんなに安っぽいが思い知らされる。

「今夜は、大学時代の友達と飲み明かすって言って来たから。泊まれるよ」

私が喜ぶとでも思ったのか、奥さんに上手い嘘をついたことを自慢げに語る。奥さんを欺いて、若い女を抱く。そのことの何に対して、得意げになってるのか。馬鹿な男。

「でも、何だか疲れちゃった」

「意外に大人しかったじゃないか。聡君達の婚約がショックだったから？」

「違うよ！」

和之が私を柔らかくベッドに押し倒して、下着をゆっくりと引き下ろした。

「シャワーを、浴びて来る」

起きあがろうとすると、肩を押さえ付けられる。

「このままいい。綺麗だなあ……。別人みたい」

綺麗だ――。私はあの時の聡の瞳を思い出す。何で、あんな目で私を見るのか。

「あそこのショップの店員さん、繭美のことモデルさんですか？ だって」

「何て答えたの？」

「女優の卵」

和之の指がそこに触れる。いつものように最初は軽く。私もいつものように、少し抵抗してみる。和之の好みだ。

確かに……、私は女優だ。

シナリオは？ まだ未完成。

母の喪失3

◆十二月十日◆

聡が必要最小限の荷物を持って、姿を消した。私が買ってやった物は全部置いていった。一つだけ。ジープを除いては。それだけ、私との関係が嫌になったってことか。私を思い出す物は、持っていない程に。

若い男と付き合えば、いつかは別れがやって来る。いや、単純な別れじゃない。若い男との別れは、心臓に杭を打たれたドラキュラのように、一瞬にして、私を殺す。そして、女の私は二度と目覚めない。

でも、私は死ねない。ズルズルと杭を引き摺りながら、聡の姿を探し求める。そしてとうとう、聡が働いていたコンビニに来てしまった。

「聡？辞めましたよ」

髪を金色に染めた若い男が、警戒心丸出しの表情で見詰め返す。

「次は、何処で働くなって言っていましたか？」

「さあ」

目を伏せたその態度で、聡の居場所を知っているのが分かった。

「変なオバさんが来ても、居ないって言ってくれよ」

聡の声が、聞こえた気がした。

「教えて下さい。お願いします」

深々と頭を下げると、「お客さん困ります。こんな所で！」と、カウンターから飛び出して、オロオロと私の項垂れた背中に触れた。

「他のお客さんの目もあるんで！」

「だったら」私が顔を上げると、男の怯えた瞳とぶつかった。

「教えなさいよ！聡の居場所を！」

男は呆気なく、聡の居場所を吐いた。それどころか、一万円札を渡すと急に饒舌になって、何処に身を寄せているかまで話してくれた。聡はカラオケ店でバイトをしながら、カズミ、あの下品な女の所に居るらしかった。許せない。でも許したい……。このモヤモヤした気持ちは、どうしたら晴れるのか。

：
◇：
◇：

家の前に、聡のジープが停まっていた。本人はシートを倒して爆睡中だ。迷ったけれど、私は窓を小さく叩いた。

「あ、お早う」

「何してるの？」

「大学まで送るよ」

ドアを開けた聡が、爽やかに言った。

「――結構です」

私は冷たく言い放つと、聡を無視して駅まで歩き出した。

「繭美ちゃん、待ってよ！」

「私を待ってたんですか？正直、気持ち悪いです」

ジープは私の歩く速度に合わせて、ゆっくりと横を走る。

「だってさ、君のパパが、仲良くして欲しいって言うんだもん」

「だからって、待ち伏せですか？理解に苦しむんだけど」

「説明するから、車に乗ってくれない？」

玄関先を掃いている近所のオバさんが、その手を止めて私達を観察していた。

「もう、止めてください！近所の人が見てるじゃないですか！」

「じゃ、乗って」

私は溜息を吐いて、聡に惨敗する。乱暴な仕草でシートベルトをする私を、聡が面白そうに眺める。そんな余裕の表情が、私の苛々に拍車をかける。

「――あの、さ」

聡がゆっくりと、語り出した。

「何で？俺が嫌いの？」

「さあ」

「パパを寝取った女の子だから？でも、それだけじゃないよね？」
「さあ、なんだろう？生理的に、駄目んじゃないかなー」

生返事を繰り返す私に、聡は悲しそうに溜息を吐いた。

ふと、フロントガラスを見ると、母の日記のフレーズが頭をよぎった。

「フロントガラスが曇る位に、キスをした」

恐らく、このジープでも……。

「君が俺を嫌いなものには、もっと他に理由があるんじゃないかって……」

「俺みたいな好青年を、嫌うヤツはいない。って言う自信？」

歪んだ私の口元が、ドアミラーに映る。自分でもびっくりするような、意地の悪い表情をしていた。こんな顔を向けられても平気でいられるなんて……。

聡の強張った横顔を眺めた。母親の為に、息子はこんな顔をするものなのか。母の日記の一文が、思い出される。

「私に息子がいたら、こんな気持ちになったのだろうか？夫に罵られた時、息子だったら庇ってくれたのだろうか？」

きつと、母に息子がいたなら。私ではなく、兄や弟がいたなら。こ

んなに必死に、母親の幸せを願う息子がいたなら、母の人生は変わっていただろうか。

「好青年だって、思っていない。俺は、自分のことは良く分かってるつもりだよ」

「だいたいさあ。私はパパと暮らしていないんだから、どうだっていいじゃん？ 私なんか、無視して下さい」

「そう言う訳には、いかないよ」

「パパなんか今まで家庭なんか顧みなかったのに、いきなり良い関係を作ろうとか。ムシが良過ぎるんだよ！」

気付いていた。私は今まで誰の言葉にも、こんなに怒りを感じたことがない。こんなに正直に、自分の気持ちをぶつけたことがない。

「正直、君のパパとママがどんな関係だったか知らない。それにまだ亡くなって間もないことも分かってる。けど、前にも言ったように、お袋には幸せになって欲しいんだ。お袋は、苦労してるから」

「――あのさあ」

私は態と、呆れた口調で言い返した。

「貴方がお袋さんを思うように、私だって母親を思ってるって考えないの？」

はっとしたように聡が車を止めるから、私は頬を流れる涙に気付いて啞然とする。何故、泣いているのか？ 私は慌てて、拳で涙を拭う。けれど聡は謝まりもせず、また他の男のようにオロオロしないことが、私を更に動揺させた。

「俺は君の彼女みたいに、洗練されたことは言えない。ごめん。ただ――」

聡の吐息を、唇に近くに感じた。

「泣いてる君は、普段よりもっと綺麗だ」

逆らわなかったのは、私と聡でもフロントガラスが曇るのか知りたかったから。

「貴方は、パパやお袋さんなんて、実はどうだっていいんでしょ？」

御影石みたいに黒目がちな瞳が、真っ直ぐに私を捕らえている。その視線に負けないように、私は言葉で聡を押し返えた。

「本当は、私が欲しくて堪らないんでしょ？」

私の生意気な言葉に聡は苦笑し、次に自嘲的な笑いに変わる。

「俺は、ただ――」

聡は冷静になって、エンジン音を響かせた。

「――今のことは、忘れて欲しい。ごめん」

キスは初めてじゃない。勿論、和之に何度もされてる。けれど、唇にはいつまでも聡の余韻が残って、私はそれを消す為に何度も拳で拭いた。

母の喪失4

和之が奥さんと上手くいってないことは、何となく分かっていた。私に会う回数が、月一から週二になっているから、そのストレスの度合いがどれ位なのか想像できる。

私は敢えて何も聞かない。奥さんと上手く行ってる余裕から、私と遊んでいる。と、言う和之の虚勢を、保ってやりたい。和之は決して、若い女に執着してのめり込んでる訳じゃない。あくまでも遊びなんだ。

だけど、たまには意地悪な事の一つも、言いたくなる。

「聡と、チューした」

「はぁ？何で？どうして？」

「――何となく」

私は素っ気なく答えて、彼に背中を向ける。それは「ワンピースを下ろして」と言う合図なのに、和之の手は首筋辺りで迷っている。

「それって、俺に嫉妬させよう作戦？」

「違うよ。単なる、事後報告」

くるりと振り返ると、和之の挑発的な瞳とぶつかる。互いの瞳の奥を探って、勝敗を見極める。彼の切れ長の鋭い瞳の中に、少し、ほんの少しの弱さを発見する。私に惚れた、弱み。

「俺の、負け」

いつになく弱気の和之は、あの愚鈍な奥さんに神経をやられている。

「繭美ちゃんは、俺の奥さんみたいになっちゃ駄目だよ」

「どう言う意味？」

ワンピースはいつの間にか、足元に柔らかく落ちている。

「男に左右される人生じゃ駄目だ。自分自身の幸せを、ちゃんと見つけなきゃ」

私の幸せを全く考えてない和之から、そんな綺麗事を聞くなんて。私は笑い出しそうになりながら、

「私はママみたいにはならない」と、断言する。

母みたいにな……母みたいにな……。考えながら、聡の唇の感触を思い出していた。でも直ぐに、和之のそれで掻き消されていく。

あの日、聡とキスを交わした後、私達はその行為に適当な理由をつけず、簡単な挨拶を交わして別れた。何故だろう……。聡には、嫌悪感と、怒りと、憎しみと、それと以外の感情が芽生えていた。好意？ いや、好意と言える程の暖かみのある感情じゃない。じゃあ何？ 混乱した頭で考えても、答えはでない。

そしてまた、恐る恐るあの日記を開いてしまう。本当は、もうこの先を読みたくなかった。けれど、答えは、ここにしかないような気がした。

母の狂気

「――繭美ちゃん、居る？」

祖母の声と、遠慮がちなノックの音。

「はい？」

私の声は、思った以上に尖っている。開けられたドアの隙間から、祖母の萎びた笑顔が覗く。

「何？」

「最近、繭美ちゃんが塞ぎ込んでいるから……。大学で、何かあったのかと思って」

祖母らしい発想だと思った。子供の人生には、家と学校の二つしかないと思っている。

「――別に。何もないよ」

「ねえ繭美ちゃん。近所の人がね、繭美ちゃんが男の人の車に乗るのを見たって言ってたんだけど。ボーイフレンドなのかしら？」

「友達」

「お友達だったら、ここに呼んでいいのよ。お祖母ちゃんは、賑やかなのが好きだから」

「分かった。誘ってみる」

祖母はにっこりと満足そうに微笑むと、部屋を出て行きそうになったが、

「あら？」と、立ち止まった。

「綺麗な手帳ね。貴女のママにプレゼントしたのに似てるわ」

そしてお約束のように、「あの子が生きていたら」と、目頭を押さえ足早に去って行く。

祖母の背中が急に小さく見えて、私を切なくさせた。でも…、私は憐れな祖母に優しく接する、ほんの少しの思いやりさえ持ち合わせてない。最悪、最悪、最悪、最悪な気分だ。

◆十二月二十五日◆

クリスマスなのに、繭美は不機嫌な顔をして部屋に閉じ籠もっている。

「彼氏のシュウ君と出掛けないの？」と聞くと、それには答えず、不味そうにケーキを頬張っていた。

「美味しくないの？」

「――普通」

ぶっきらぼうに答えると、紅茶のカップを掴み部屋へ上がって行く。繭美が小さい頃

から大好きだったケーキ屋さんに、わざわざ注文したと言うのに…。

時計を見ると、十時近かった。夫は勿論帰って来ない。もう、どうだっていい。

今日、聡の居場所を突き止めた。例の汚い女、佐々木カズミのアパート。カズミと聡は小学校からの付き合いで、彼女も今は美大生。調べは付いていた。今夜はカズミと仲良くケーキを食べてるんだろう。悔しい。苦しい。悔しい。苦しい――。

「繭美、ママちょっと出掛けて来るから……」

部屋のドア越しに声を掛けても、何の返答もない。私は一人だ。これで 私を唯一認めてくれた聡に拒否されたら、もう、消えて無くなるしかない。

カズミのアパートは、聡が最初に住んでいた所と同じように、古く汚く貧乏臭い匂いがした。

聡のジープを確認して、表札に「佐々木」と「溝呂木」と並ぶ名前を見た時、頭の中が怒りでパンパンに膨れあがった気がした。

その激情のまま、木製のドアを力任せに叩き続ける。慌てて開けられたドアから覗いた聡の顔は、驚きよりも恐怖に引きつっていた。その顔を見たら、私の怒りは一気に萎えた。

「ゆ、祐子さん？」

聡の怯えた顔の背後から、気の強そうなカズミの瞳がこっちを見ている。

「オバさん、何を狂ってんのさ。醜いよ」

その瞳は、そう語っている。

「祐子さん！ もう終わりにして下さい。お願いします！」

悲鳴に近いその声が、萎んだ怒りに火をつける。私から欲しい物を全て奪ったら、「終わりにして下さい」だと？ 冗談じゃない！

「貴方が終わりとか、終わらないとか、決められる立場に居ると思う？ 思い上がるのもいい加減にしなさいよ！」

一歩前に踏み出すと、聡が泣きそうな顔を背けた。そんな顔しないで！けれど、この怒りを、燃えたぎる怒りを吐き出すまで、私はこの口を閉じることができない。

「貴方は野良犬。餌が欲しくて中年の女にホイホイ付いて来て、簡単に腰を振って……。野良犬が、でかい口を叩くんじやないよ！ 貴方なんか、私のお金が無ければ、ただの貧乏フリーターじやない！」

呆氣に取られて佇む聡を突き飛ばして、私は車に飛び乗った。許せない！許せない！許せない！どいつもこいつも、殺してやる！

母の狂気2

：
◇：◇：

日記の中の母は、どんどん狂って行く。だけど記憶の中の母は、暗く沈んでいた。でもあの淀んだ瞳の奥に、聡への憎悪を隠していたのだとすれば、そうさせたのは私と父に違いはない。申し訳ないと言う気持ちと、何故そこまで頑なに殻に閉じこもる必要があったのか不思議に思う。

私はいつも、母に拒絶されてるように感じていた。母には母の世界があって、私がどんなに良い子でいても、その世界に呼び入れられられなかった。寂しさはいつの日か、そんな母を疎んじる気持ちへと繋がった。

何故母は、私を抱きしめてくれなかったのだろうか？何故、愛してくれなかったのだろうか？考えても、考えても、答えは出ない。

「なあんだ。またあんたか」

カズミは、眉間に皺を寄せた顔を私に向けた。

「――聡は、いないよ」

「別に、彼に会いに来た訳じゃないから」

乱暴に五百円玉を彼女へ渡し、中へ入った。

「あんたさあ」と、舐めるように私を見た。

「結構、好きだよ」

「はあ？」

「あの溝呂木のお嬢さんより、よっぽどいい。聡のこと、取っちゃいなよ」

赤く染めた髪を掻き上げたその指には、何色ものマニキュアが塗られている。この女はまるで、南国の巨大なインコだ。

「そう言うあんたが、取ればいいんじゃないの？」

くくく……、今度は喉の奥で低く笑った。

「私にゃ、無理」

「何で？彼の事を好きなんでしょ？」

「好きだけど、そう言う好きじゃない」

「どう言う意味？」

「私じゃ、男は愛せない」

「――え？」

唐突に告白された事実には、私は啞然とした顔で黙り込んだ。

「あんたでも、そんな顔をするんだ。面白れえ」

カズミは私の弱味を直ぐに見付ける。そんな、力に長けていた。

「何よ、嘘なんでしょ？」

「マ、ジ、だよ」

煙草に火を付けて、一気に吸い込んだ。そして瞳を細めると。煙を勢いよく私の爪先辺りに吐き出す。

「先にカミングアウトしたのは、私のせいで聡の初恋を壊したくないから。奴は私が信用した、初めての男だから」

「――初恋？」

「あんたさあ、頭が良さそうなのにさあ、意外と鈍感だね」

「あんた、あんた、っていい加減にしてよ」

居心地が悪い。カズミには私の心の中などお見通しで、見通した上で小馬鹿にしているのが分かった。しかし、悔しいけれど、この女には敵わない。別のステージにいる女、そう感じた。

「帰る」

去ろうとすると、「繭美！」と、まるで昔から知ってる幼馴染みのように呼び止められた。

「真実の愛を、見失っちゃいけないよ」

「真実の愛」、その言葉の気恥ずかしさと突き刺さる真直ぐさにたじろぎながら、くるとカズミを振り返る。

「恥ずかしげもなく、色んな事を語るね」

「生き方自体が、恥を晒してるようなもんだからさ――」

陽気な声に反して、私を見つめる瞳は真剣だった。

「昔から、好きなの？」

「――女が？」

曖昧に聞いたら、真っ向から切り替えされた。この瞬間に、私はカズミに負けたと思った。私の安っぽい気遣いなんて、カズミにとっちゃお笑いではない。そう感じた。

「うん」

「意識したのは、中学校。色々とうざい事が立て続けに起こってさ」
そう言って左手のリストバンドを外すと、醜い毛虫が這っていた。
深い傷に、容赦なく入った糸の跡。

「リスカなんて生易しいもんじゃないよ。私は出刃包丁で手首を落
としかけた」

「あれ？」黒く縁取りした目が、私を覗き込む。

「何で？って聞かないの？」

「じゃ、なんで？」

「母親の再婚相手に、虐待とレイプを繰り返されてたから」

「手首を切り落としたらさ」と、彼女は陽気に言った。

「少しは可哀想に思って、優しくしてくれるかもしれないじゃん？」
「――で、優しくしてくれたの？」

「いやあ」と、ケラケラ笑い出す。

「病院から退院したら、俺への当てつけか？ってもっと殴られた。
そんな馬鹿男でも、死んで生命保険を残してくれて、そのお陰で大
学に行けてるから、まあいっかって感じだよ」

そして後悔したように、カズミは顔を顰めた。

「あゝあ。べらべら喋べっちゃった。綺麗な子を見ると、気を引き
たくてつい……」

「不幸自慢？」

「すげえ。私の話を聞いてそう言ったのは繭美が始めてだよ。惚れたよ、マジで」

「で、今の話のポイントは何よ？」

「――悲劇のヒロインぶってんじゃ、ねえよ」

「むかつく女」

でも、カズミの態度がむかつくのは、彼女のいうことが当たってるからだ。

「ねえ、本当に女が好きなの？ 聡とはなんでもないの？」

「仲の良い幼馴染みだよ、聡とは」

そして、そろそろ閉めるから、と私を追い立てた。

カズミの告白は、本当なのだろうか？ ならば……、母の日記の中の、カズミと聡の関係は何なのだろうか？ 床をモップで拭くカズミに、思い切って聞いてしまいたかった。カズミなら、母の気持ちを、人間を、女を、分かる気がした。

「ちょっと、早く帰ってよ」

「分かったよ――」

けれどどうしても、カズミに問い質す勇気がでなかった。

母の狂気3

ギャラリーを出ると、聡の驚いた顔をぶつかった。

「あれ？来てたの？」

私達は数日前の衝動的な行動を、忘れてしまったかのように振る舞った。そうすることで、互いの気まずさを誤魔化すことができる。

「もう帰るの？」

「あの子とかなり深い話をしたよ」

「カズミと？あいつ、君と話したの？」

「色々と、カミングアウトしてくれたよ」

聡が「まいったなあ」とくしゃくしゃと髪を掻き上げる。私は母がしたように、自然に、自分でも驚くほど自然に、聡の髪を直してやる。

「――ありがとう」

母が言うように黒目がちな大きな瞳。その奥には何があるのか？私には分からない。

「恋人と、一緒？」

恋人なんて古くさい言葉で、聡が私との間に壁を作ったのを感じた。柔らかな、拒否。

「一人」

「それに」と、私は意を決して告白する。
「彼は恋人じゃない。奥さんがいるもん」
「へっ」

彼の瞳が、一回り大きくなった。

「彼の結婚生活は不幸なの？」
「不幸というより、退屈なんだろう」
「退屈？じゃあ、幸せな結婚なんだな。狡いな、男は狡い」
「貴方も？貴方も、狡い？」
「そうだな……。狡いな、きっと」

くしゃくしゃと髪を掻き毟ると、大げさに肩の力を抜いた。

「時々、自分の馬鹿さ加減に嫌気が差す」
「――傷つけた、女がいるの？」
「そんなつもりはなかったんだけど……。これは言い訳か。俺は最初から、その人の優しさを、利用しようと思ってたから」
「ふん」と私は鼻を鳴らす。
「貴方でも、反省するのね」
「繭美ちゃんの中で、俺って相当の悪人なんだね」
「実際そうでしょう？」
「そうかも知れない……。繭美ちゃんには、嘘が吐けないよ」

真っ直ぐに私を見つめる瞳の奥には、聡と母の過去は見えない。その奥が、見たい。

「じゃ、帰る」

私の小指に、聡の手が一瞬触れた。それは偶然だったか、何かの

合図だったか……。私はそれを確めもせず、その場を後にした。確かめたくなかった。知りたくなかった。聡の本心など。

また、あの日記を手にとってしまった。そして、明かに薄くなつたことに気付く。パラパラと捲ると、最後の数ページが乱暴に破られていた。祖母だ。日記を、読んだんだ。また、私を無菌室に入れている。

真実から遠ざけようとしている。

「――どうして？」

台所に立つ祖母は、「何？」と弾かれたように振り返った。

「日記。読んだでしょ？」

「ああ、それ――」

「勝手に部屋に入るのはしょうがないことなのよね？ここはお祖母ちゃんの家なんだから」

「そんな……」

祖母は一瞬、悲しそうな顔をしたが、直ぐにいつもの優しい表情が戻った。

「ママの日記、読んだの？」

「――ええ」

「最後のページを、破ったの？」

「葉が挟まってた。繭美ちゃんはまだ、読んでないわよね？」

祖母は私の質問には答えず、まずそのことを確認した。

「読んでない……。何が書いてあったか、教えて」

私が家族の誰かに意志表示したのは、これが初めてかも知れない。祖母は家事に気を取られている振りをして、私の目を見ようとしなかった。誤魔化そうとしている。直感で、そう感じた。

「繭美ちゃんは、知らなくても良いことよ」

「私が知らなくても良い事？知るべきかどうかは、私自身が決めるよ！」

その剣幕に、祖母は一瞬たじろいだ。そして、私の追求を逃れることは難しいと悟ったのだろう、別の作戦へ打って出た。

「私はあの子の母親なの。あの子を悪く言いたくないのよ。勘弁して。死んでからまで、あの子を辱めたくないの」

「――悪く言いたくない？」

「繭美ちゃん、許して」

祖母の萎びた頬に、涙が伝う。私の足下に跪いて、許してやっさと繰り返す。

「でも……」言いかけて、祖母の泣き顔に挫けてしまった。私の心が、今までない位に激しく乱れている。

「分かった。お祖母ちゃんもういいよ」

祖母は私を抱きしめて「ごめんね」と、泣きながら言い続けた。何が「ごめんね」なんだろうか？私は訳も分からず、そんな祖母の背中をさすり続けた。

母の狂気4

「——うん…、うん…、だからさ……」

さっきから和之は、電話の相手に何度も反論を試みていたが、失敗に終わっているようだった。

最初は私の胸を愛撫しながら余裕で答えていたのに、今ではその手はイライラと枕を叩く。電話の相手は、勿論奥さんだ。

時折、和之は興奮して自分の唇を舐めるから、唾液に濡れたそれで早く私にキスして欲しいと思う。

愚鈍な女と妻を侮った男は、その愚鈍さ故の率直さにやられている。

「だから今すぐは駄目だよ。俺にだって付き合いがあるんだから」

どんな付き合いだ？ 私は笑い声を立てないように、慌てて口を塞ぐ。

「もう切るよ。君らしくないな。そんなに取り乱して。……じゃ」

強引に電話を切った和之は、私を強く抱きしめて足を絡めて来る。

「ああ、疲れた」

「どうしたの？ 奥さん大丈夫？」

「近所の人が、俺と繭美ちゃんが一緒にの所を見たみたい。うちの奥さん、凄い剣幕だったよ——」

「ふーん。じゃ暫く会うのを止めにする？」

「繭美ちゃんも、意地悪なことを言うようになったね」

「和之さんから学んだんだよ」

「——そうか」

短く笑うと、私から呆気なく離れてしまった。

「俺が癒やされるのは繭美ちゃんだけだから、あんまり虐めないでよ」

弱々しい声を出す和之は、いつもより老けて見える。

「奥さんと離婚すれば？そんなに、大変ならさ」

「結婚ってさ、繭美ちゃんが考える程、単純じゃないんだよね」
また携帯が鳴った。和之は番号を確認すると、眉を顰める。

「奥さん？」

「うん……。うざったい女って苦手」

携帯の電源を切ると、私の上に覆い被さって来た。でも、人間関係ってそもそももうざったいもんじゃないの？和之は本当に、勝手な男だ。

「繭美ちゃん、今日お泊まりできる？」

「——いいよ」

和之は狡い。男は狡い。父も和之のように、あの女に甘え癒やされていたのだろうか？和之の背中を優しくさすると、不思議な感情が芽生えて来た。今まで以上に、私の中に女を感じる。

久しぶりに父の家に来ていた。ずっと使っていなかった鍵を差し込んでゆっくり回すと、過去の扉がふわりと開いて、沢山の思い出が私を包む。しかしその思い出は、まだ私の中で柔らかく懐かしく美化されていない。押し寄せてくる感情に苦しくなって、慌てて頭を振った。

「何してるの？」

急に声を掛けられて、リビングで体を竦める。振り返る私を、啞然とした目で見つめるのは聡だった。

「貴方こそ、何をしてるの？」

「お袋が買い出しに行つてて。待ってるんだ。」

「貴方のお袋さんは、もうすっかり奥さん気取りな訳だ」

「――まあね」

私の憎まれ口に全く動じず、聡はさらっと言った。

「今夜は君のお父さんに相談することがあるから、帰るのを待ってるんだ」

「あっそ」

「繭美ちゃんも出席してくれるよね？ 結婚式」

「私はまだ、パパの結婚を許してないよ！」

「違うよ。俺達の結婚式だよ」

怒鳴り出す私に、聡が慌てて訂正した。そうなのか、こんなに早く聡と亜矢香が結婚するとは思っていなかった。

「式はいつ？」

「来月、七月に。亜矢香さんの友達が経営するホテルが、たまたま空いてるらしいから」

「――急だね」

「お父さんが亡くなって、彼女も寂しいんだよ」

「本当に、結婚したいの？」

前々から思っていた疑問が、つい出てしまった。

「したいと、思う。彼女のことが、とても大事だ」

「思う？来月に結婚しようとする男にしては、随分と曖昧じゃん」
「そうだね……」

聡は何か言い掛けて口籠もる。気まずい沈黙が流れた。

「ねえ——」

聞くのは今だと思った。あの事を。母と、聡のことを。私は大きく息を吸い込んで、あの質問を吐き出した。

「私の母と、親しかったんでしょ？」

途端に聡の顔が青ざめ、唇が微かに震え。何を慌てているんだろうか？いつかバレるって、考えなかったんだろうか？開き直ったら良いじゃないか。日記の中のように。

「母の日記に、貴方のことがびっしり書いてあった」

「あんなことになるなんて、誰も予想してなかったんだ」

「あんなこと？貴方が、そうさせたんでしょ？母を追い込んだんでしょ？」

「違う、違う！」と、聡は激しく首を振った。

「日記にどんなことが書いてあったか知らない。それに、君のママのことを悪く言いたくない」

「勝手なもんね。みんな死んでから、ママのことを気にし出して」

「亡くなる前から、僕達はママを心配してた。そして君を守ろうと、必死だったんだ」

「私を守る？——私に、何を隠してるの？」

「俺の口からは言えない。君を傷つけないから」

「じゃあ、パパに聞けばいいの？」

聡は私から目を逸らして俯いた。急に怖くなって、足が震えて立っていられなくなる。私は何も知らない。最悪なことに、真実はあの日記より酷いのかも知れない。

「――大丈夫？」

縫り付いた聡の腕は、思っていた以上に遅しくて私を戸惑わせた。

「皆、君を大事に思ってるんだ。それだけは分かって欲しい」

聡の腕の中は心地よかった。誰の腕の中より、私を落ち着かせる。ママが縫った胸でもいい。このまま暫くこうしていたい。

「――君が、好きなんだ」

聡は微かに聞こえるような、弱々しい声でそう告白した。

「聞き返さないで。ただ……、気持ちを伝えたら、それで満足なんだ」

それで満足？ やっぱり男はどいつもこいつも勝手だ。私の弱った心に、滑り込んで来る切ない声。こんな時に、卑怯だ。なのに、胸が苦しいのは何故だろう？

「暫くこうしていよう？」

その提案には、和之のような嫌らしさや性的な匂いは無かった。

「聡……」

聡——、聡——、聡——、私も、母のように囁く。私の言葉に聡は鼓動を早くして、腕に力を入れた。私が今まで欲して物が何なのか、はつきり分かった。でも、分かりたく無かった。知りたくなかった。何故なら聡の肌の温もりは、そのままそれに触れていた母の記憶に直結している。この掌で母の頬や、項や、胸元に触れて、この腕で母を抱いた？その度に母は喜びと戸惑いの吐息を漏らしたのだろうか。

おぞましすぎる——。

私は間違っている。でも聡から離れられない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8989t/>

母の恋人

2011年10月18日14時12分発行